



本年掉尾を飾る

師走の若き人秋操の細編

橋の坂
交樂陸

乍憚口上

當年も早や残んの月と相成申候處市中皆々様には銃後定めし御繁多の御事と推察仕候就ては當座本年掉尾の興行と仕り特に若手新進の大競演を以て燃え立ちたる意氣と熱との潑刺たる技藝の御鑑賞を希ふ事と相成り狂言の儀もそれ〴〵得意の持ち場を選定して十二分の腕を揮はしむる次第に有之候へば何卒平素御引立の御餘光を以て當興行には是非とも奨勵の御思召を以て陸續御來場相成度偏に御願奉申上候

昭和十四年十二月一日

四ツ橋 文樂座 敬白

昭和十四年十二月一日初日

初日午後二時開演
毎日午後三時開演

・御觀覽料・

一等席 御一名 金二圓

(二階座席三十錢上り)

二等席 御一名 金一圓

三等席 御一名 金五十錢

(外に各等入場税一圓)

一等御座席
一等椅子席 } は五日前より

前賣切符發賣致居候

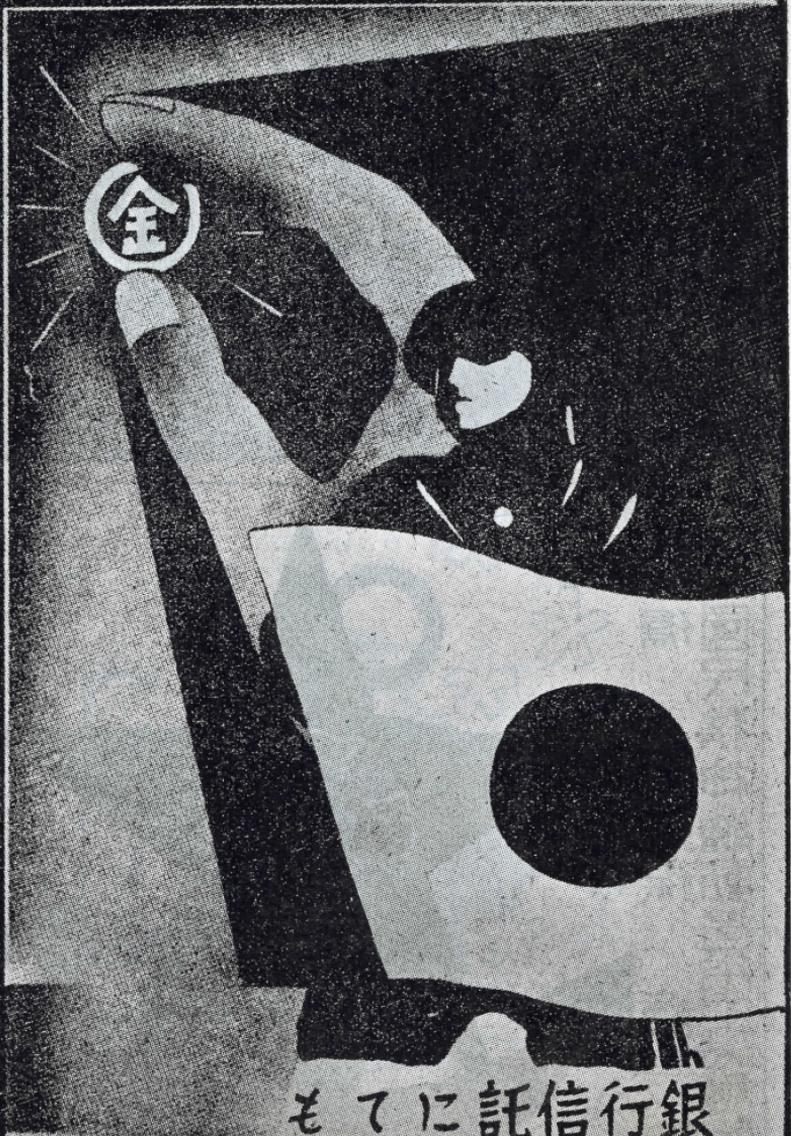
前賣切符 專用電話 南(76)四七壹壹番

一般御用の電話 南(76)三〇三二番
南(76)三七八八番

お草履の準備は御座りますが、靴、草履はそのまゝ御入場出來ますから御便利で御座ります。

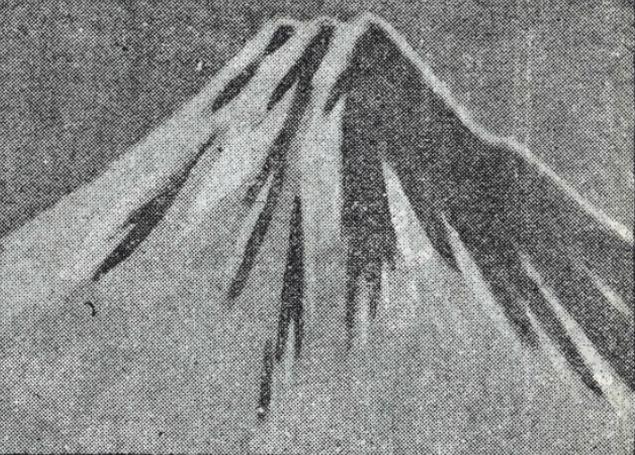
申告の金の進

んで政府に賣りませう



銀行信託に
お取次ぎ致し
まへ

國民精神總動員

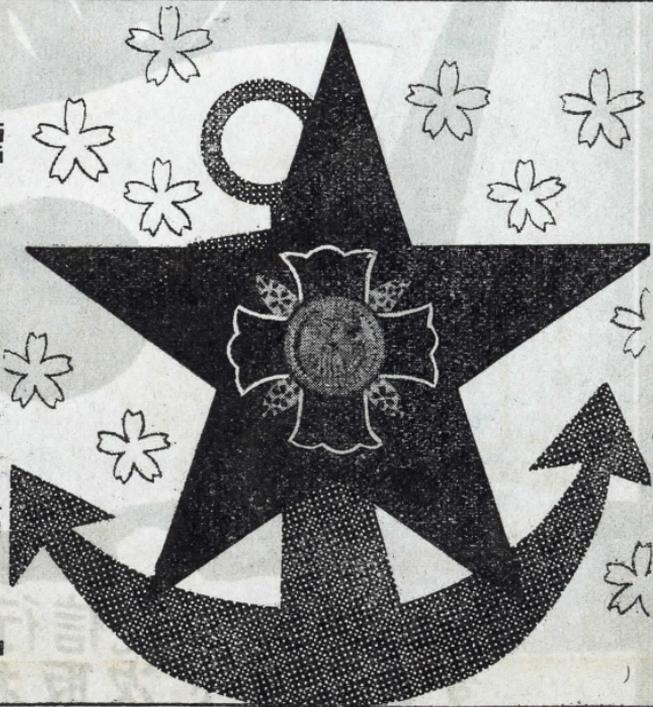


憲報

國一

堅忍持久

國を護つた傷兵護れ



傷兵保護院
國民精神總動員中央聯盟

本年掉尾を飾る

師走の若手人形浄瑠璃

十二月一日初日

初日午後二時開演
毎日午後三時開演

假名手本忠臣蔵

鶴ヶ岡兜改より戀歌の段 三時 (開幕)

三時卅五分 (閉幕)

五時 (幕間)

下馬先進物の段 三時四十分

四時五十分

殿中及傷の段 四時五十分

四時卅分

裏門の段 四時卅分

四時五十分

道行旅路の嫁入 五時

五時卅分

山科閑居の段 五時卅分

七時

十五分

三半 七勝 艶容女舞衣

酒屋の段 七時十五分

八時卅五分

十分

夕きり 伊左衛門 曲輪 焔

吉田屋の段 八時五十分

九時四十分

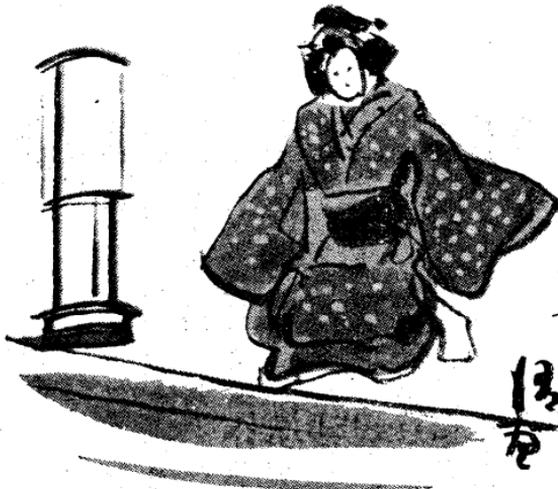
十分

辰 鴛色相肩

卯 噺の段 九時五十分

十時廿分

打出し



たから屋
ほろ

れは思ひも寄ざる御事。新田が清和の末なり迎着せし兜を尊敬せば、御旗下の大小名清和源氏はいくらもあり、奉納の儀然るべからず候と遠慮なく言上す、イヤ左様にては候まじ此若狭之助が存るは全く尊氏公の御計略、新田に徒黨の討洩され御仁徳を感心し、攻ずして降参さす御方便と存奉れば、無用との御評議率爾也と。言せも果ず、イヤア師直に向て率爾とは出過たり、義貞討死したる時は大わらは、死骸の傍に落散たる兜の数は四十七、どれがどう共見しらぬ兜、左様で有うと思ふのを、奉納したる其跡でさうでなければ大きな恥、生若輩な形をして御尋もなき評議、引込で御居やれと御前よきまゝ出る儘に、杭共思はぬ詞の大槌打込れて迫立目色鹽谷引取て、コハ御尤成る御評議ながら、桃井殿の申

さるゝも治代の軍法、是以て捨られず雙方全き直義公の御賢慮仰奉ると申上れば御機嫌有、ホ、左言はんと思ひし故、所存有て鹽谷が婦妻を召連よと言付し、是へ招けと有りければはつと答の程もなく、馬場の白素足徒にて、蹠で庭掃く櫛は、神の御前の玉箒玉も欺く薄化粧、鹽谷が妻のかほよ御前途下つて畏る、女好の師直其儘聲懸、鹽谷殿の御室かほよ殿最前より嘸待遠、御大義く、御前の御召近うくと取持顔、直義御覽じ、召出事外ならず、往元弘の亂に後醍醐帝都にて召れし兜を、義貞に給はつたれば、最期の時に着つらん事疑はなけれ共、其兜を誰有て見驗人外になし、其比は鹽谷の妻、十二の内侍の其内にて、兵庫司の女官なりと聞及ぶ、嘸見知らんず、覺あらば兜の本阿彌、目利目利と女には

嚴命さへも和らかに御受申も又願冥加に餘る君の仰、夫こそは私が、暮手馴御着の兜、義貞殿拜領にて蘭奢待といふ名香を添て給はるゝ御取次は則かほよ、其時の勅答には、人は一代名は末代、すは討死せん時、此蘭奢待を思ふ儘、内兜に炷占着ならば、鬢の髪に香を留て、名香薫る首取しといふ者あらば、義貞が最期と思召れよとの、詞はよもや違ふまじと申上たる口元に、下心有師直は小鼻いからし聞居たる直義委く聞召ヲ、詳なるかほよが返答、左あらんと思ひし故落散たる兜四十七、此唐櫃に入置たり、見分させよと御上意の下侍屈る腰の海老錠を明る間遅しと取出すを、鈍ず臆せず立寄て、見れば所も名にし負ふ、鎌倉山の星兜とつばい頭獅子頭、扱指物は家々の流義くゝに寄ぞかし、或は直平筋兜

鍛のなきは、弓の爲、其主々の好逆
 數々多き其中にも、五枚兜の龍頭、
 是ぞと言ぬ其内にばつと薰りも名香
 は、かほよが馴し義貞の兜にて御座
 候と指出せば、左様ならめと一決し
 鹽谷、桃井兩人は、寶藏に納べし、
 此方へ來れと御座を立、かほよに御
 暇給はつて段かづらを過給へば、鹽
 谷、桃井兩人も打連てこそ入にける
 後にかほよは、つぎほなく師直様は
 今暫し御苦勞ながらお役目をお仕舞
 有ておしづかにお暇の出たこのかほ
 よ長居は恐れおさらばと立上る袖、
 摺寄て、じつと控へ、コレまあお
 待ち待たまへ、けふの御用仕舞次第
 其元へ推參して、お目にかけるもの
 有が幸ひのよい所召出された直義公
 は我爲の結ぶの神御存じのごとく我
 等歌道に心を寄せ、吉田兼好を師範
 と頼み日々の狀通其元へ届けくれよ

と問合せの此書狀いかにもとの御返
 事は口上でも苦しくない、袂から
 袂へいる、結び文顔に似合ぬ存參る
 武藏鎧と書たるを、見るよりはつ
 と思へ共、はしたのふ恥しめて却つ
 て夫の名の出ること、持歸つて夫に
 見せふか、いやいや夫では鹽谷殿憎
 しと思ふ心から怪我過にもならふか
 とものを言はず投返す、師人に見
 せじと手に取上げ、戻すさへ手にふ
 れたりと思ふにぞ、我ふみながら捨
 も置れずかどうかは言はぬよい返事聞
 までは、くどいてくどき拔、天
 下を立ふと伏せふ共儘な師直、鹽谷
 を生ふと殺そふ共かほよの心たつた
 一つ、何んとそふでは有まいかと
 顔開にかほよが返答も、涙ぐみたる
 斗りなり、若折から來合はす若狭之
 助、例の非道と見て取氣轉かほよ殿
 まだ退出なされぬかお暇の出で隙取

は却て上への恐れ早お歸りと追立れ
 ば、きやつ扱はけどりしと、弱味
 をくはぬ高野師直、ヤア又しても言
 はれぬ出過ぎ立てよければ身が立た
 す此度の役目、首尾よふ勤めさせく
 れよと、鹽谷が内證、かほよの頼み
 そふなくてはかなはぬ管、大名でさ
 へあの通り、小身者に捨知行誰が蔭
 で取らする、師直が口一つで五器提
 ふも知れぬあぶない身代、夫でも武
 士と思ふじやまでと邪魔の返報にく
 て口、くはつとせき立若狭之助刀
 の鯉口碎る程握り詰は詰たれ共、神
 前なり御前なりと一旦の堪忍も、今
 一言が生死に詞の先手還御ぞと、御
 先を拂ふ聲々に詮方なくも期を延す
 無念は胸に忘れず、惡事悻悻^{まじまじ}運
 強く切れぬ高野師直を、あすの我
 身の敵共知ぬ鹽谷が後押へ、直義公
 は悠々と歩御成賜ふ御威勢、皆人の



下馬先進物の段

(豊竹富太夫
鶴澤友太郎)

人形

高野師直	吉田榮三
加古川本藏	吉田玉藏
鷺阪伴内	吉田玉德
鹽谷判官	桐竹門造
早野勘平	吉田玉幸
こし元おかる	吉田光之助

兜の龍頭御藏に入る数々にも四十七字のいろは分かかなの兜を和らげて兜頭巾のほころびぬ國の掟ぞ、久方の

(床本) 下馬先進物の段

足利左兵衛督直義公、關八州の管領と新に建てし御殿の結構、大名小名美麗を飾る晴装束、鎌倉山の星月夜と袖を列ぬる御馳走に、能役者は裏門口、表御門はお客人、御饗應の役人衆、正七ツ時の御登城、武家の威光ぞ輝きける、西の御門の見附の方、ハイ／＼／＼といかめしく、提燈照らし入り来るは、武藏守師直、權威あらはす鼻高々、花色模様の大紋に胸に我慢の立烏帽子、家來共を役所々々に残し置き、下部わづかに先を拂はせ、主の威光の召おろし、鶴の眞似する鷺坂伴内、肩臂いからし申しお旦那、今日の御前表も上首尾々

々々、鹽谷で候の、イヤ桃井で候のと、日頃はとつばさつばとどしめけど、行儀作法は狗を、屋根へ上げた様でさりととは／＼腹の皮、イヤそれにつきかね／＼鹽谷が妻顔世御前、未だ殿へ御返事致さぬ由、お氣にさへられぬ、器量はよけれど氣が叶はぬ、何の鹽谷づれと、當時出頭り師直様と、ハイ／＼聲高に口きくな、主ある顔世、度々歌の師範に事寄せ口説けども今に叶はぬ、即ち彼が召使かると云ふ腰元新參と聞き、彼奴をこまづけ頼んでみん、さてまだとリエがある、顔世が誠にいやならば夫鹽谷に仔細をぐわらりと打明けるところを云はぬは樂みと、四足門の片蔭に主從點頭話合ふ折もあれ、見付に控えし侍あわたゞしく走出で、我々見付のお腰掛に控へし所へ、桃井若狭之助家來加古川本藏、師直様

に直にお目にかゝらん爲、早馬にてお屋敷へ参つたれども早御登場、是非御意得奉らんと家來も大勢召連れたる體、如何計ひ申さんやと聞くより件内騒ぎ出し、今日御用のある師直様へ、直に對面とは推參なり、某直談と走行くを、待て〜件内仔細は知れた、一昨日鶴ヶ岡にての意趣晴し、我が手を出さず本藏めに云付け、この師直が威光の鼻をひしがんため、ハ、ハ、ハ、件内ぬかるな、七つにはまだ間もあらん、是へ呼出せ仕舞うてくれん、成程々々家來ども氣を配れと、主従刀の目釘を濕し、手ぐすね引いて待ちかけ居る、詞に従ひ加古川本藏、衣紋繕ひ悠々と打通り、下部に持たせし進物ども、師直が目通りに並べさせ、遙か下つて畏り、ハア憚りながら師直様へ申上げ奉る、この度主人若狭之助、尊氏

將軍より御大役仰付けられ下さる段武士の面目、身に餘る幸福、若輩の若狭之助、何の作法も覺束なく如何あらんと存ずる所に、師直様萬事御師範遊ばされ、諸事をお引廻し下さり候故、首尾よく御用相勤むるも全く主人が手柄にあらず、皆師直様のお執成と、主人を始め奥方一家中、我々迄も大慶この上や候べき、さるによつて近頃些少の至りに候へども右御禮のため一家中よりの贈り物、お受け遊ばされ下さらば、生前の面目一入願ひ奉る、則ち目録お取次と件内に差出せば不思議さうにそつと取り押し開き、目録一ツ、巻物卅本黄金三十枚、若狭之助奥方、一ツ黄金二十枚、家老加古川本藏、同十枚番頭、同十枚、侍中、右の通りと讀上ぐれば、師直はあいた口塞がれもせずうつとりと、主従顔を見合せて

氣拔けの様にきよろりつと祭の延びた六月の晦日見るが如くにて、手持無沙汰に見えにける、俄に言葉あらためて是は〜痛み入つたる仕合、件内こりやどうしたもハテさて〜、ハアお辭儀申さばお志背くといひ、第一は大きな無禮、エ、式作法を教ゆるも、こんな折にはとんと困る、ナニ物ぢやワイヤハヤ本藏殿、何の師範致す程の事も無いが、とかくマア若狭之助殿は器用者、師範の拙者及ばぬ〜、コリヤ件内進物ども皆取納め、エ、不行儀な、途中でお茶さへ得進ぜぬと、手の裏返す挨拶に本藏が胸算用してやつたりと猶も手をつき、最早七ツの刻限、はやお暇、殊に今日はなほ晴のお座敷いよ〜主人の儀お引廻し頼み存ずると、立たんとする袂を控え、ハテえいわいの、貴殿も今日のお座敷

の座並、拜見なされぬか、イヤ陪臣の某、御前の恐れ、大事な大事な、この師直が同道するに誰もくつとも云ふものない、殊に又若狭之助殿も、何ぞれかぞれ小用のあるもの平に〜と勧められ、然らばお供仕らん、御意を背くは却つて無禮、先づお先にと行跡につき、金で面撲る算用に、主人の命も買うて取る、二一天作算整の桁を違へぬ白鼠、忠義忠臣忠孝の、道は一筋真直に、打連れ御門に入りける。程もあらせず入来るは、鹽谷判官高定、是も家來を残し置き、乗物道に立てさせ譜代の侍早野勘平、朽葉小紋の新袴、ざわ〜ざわつく御門前、鹽谷判官高定登城なりと音なひける門番罷り出で、先程桃井様御登城遊ばされ御尋ね、只今又師直様御越にて御尋ね、早御入と相述べ、ナニ勘平最早皆

々御入とや、遅なはりし残念と、勘平一人お供にて御前へこそは急ぎ行く、奥の御殿は御馳走の地謡の聲播磨湯、高砂の浦につきにけり〜、謠ふ聲々門外に、風が持て来る柳かげ、その柳より風俗は、まぬけぬ所體の十八九松の、縁の細眉も堅い屋敷に物馴れし、奇持帽子の後帯、供の奴が提燈は、鹽谷が家の紋所、御門前に立やすらひ、コレ奴殿、やがてもう夜も明けるこなた衆は門内へは叶はぬ、こゝから往んで休んでやと、詞に従ひナイ〜と、供の下部は歸りける、内を覗いて、勘平殿は何してぞ、どうぞ逢ひたい用がある、見廻す折から後影、ちらと見付け、おかるぢやないか、勘平さん逢ひたかつたにようこそ〜、ム、合點のゆかぬ夜中と云ひ、供をも連れず只一人、さいなあ、ここ迄送りし

供の奴は先へ返した、わし一人残りしは奥様からの御使、どうぞ勘平に逢ふてこの文箱、判官様のお手に渡し、お慮外ながらこの返歌をお前のお手から直に師直様へお渡しなされて下さりませと傳へよ、然しお取込の中間違ふまい物でなし、マア今宵はよしにせうとのお詞、私はお前には逢ひたい望み、何のこの歌の一首や二首、お届けなさるゝ程の間のない事はあるまいと、つい一走りに走つて來た、ア、しんどやと吐息つく、然らばこの文箱旦那の手から師直様へ渡せばよいぢやまで、どりや渡して來う待つて居いと云ふ中に、門内より勘平々々々々判官様が召しまする、勘平々々、ハイ〜只今それへエ、忙しないと、袖振切つて行く後へ、どせう踏む足つき驚坂内、何とおかる、戀の智慧は又格別、勘平



殿中双傷の段

豊竹和泉太夫

鶴澤 叶

人形

加古川	本藏	吉田	玉藏
塩谷	判官	桐竹	門造
茶道	珍才	吉田	文枝
高野	師直	吉田	榮三
桃井	若狭之助	桐竹	紋太郎

めとせよくつてゐる所を、勘平々々且那がお召と呼んだはきついかに、師直様がそもじに頼みたい事があるとおつしやる、我等はそきまにたつた一度、君よ君よと抱付くを突飛ばし、コレみだらな事を遊ばすな、式作法のお家に居ながら狼藉千萬、あた無作法なあた不行儀と、突退くれば、それは情れないくらがり紛れに、ついちよこくと、手を取り争ふその中に伴内様々々々、師直様の急御用、伴内様々々々と、奴二人がうるう眼玉で是はしたり伴内様、最前から師直様がお尋ね、式作法のお家に居ながら、女を捕へあた不行儀なあた無作法と、下部が口々、エ、同じやうに何ぬかすと、面ふくらして連立ち行く、勘平後へ入代り、何と今の働き見たか、伴内めが一杯食うてうせをつた、俺が来て且那が呼ば

しやると云ふと、おけ古いとぬかすが面倒さに、奴共に酒飲ませ、古いと云はさぬこの術、ハ、ハ、まんと首尾はしおふせた、サアその首尾序でにな、ちよつとと手を取れば、ハテさてはづんだ、まあ待ちやいの、何云はんすやら、何の待つことがあるぞいな、もうやがて夜が明けるわいな、是非にに是非なくも、下地は好きなり御意はよし、それでもこゝは人出入、奥は謠の聲高砂、松根に倚つて腰を磨れば、アノ謠で思付いた、イザ腰掛てと手を引合ひ打連れて行く。

(床本) 殿中双傷の段

脇能過て御樂屋に鼓の調べ太鼓の音天下泰平繁昌の壽祝ふ直義公、御機嫌斜ならざりける、若狭之助は兼て待つ師直遅しと御殿の内奥を窺ふ長

袴の紐しめくゝり氣配し、己師直眞
ツ二つと刀の鯉口息を詰め待つ共知
らぬ師直主従遠目に見付け是は
若狭之助殿扱々お早い御登城、イヤ
ハヤ我折りました、我等閉口々々
ヤ閉口序に貴殿に言譯致し、お詫申
事が有ると兩腰ぐけらりと投出し、
若狭之助殿改めて申さねばならぬ一
通り、日外鶴ヶ岡で拙者が申した過
言ヲ、お腹が立つたで有るふ尤じや
が、そこをお詫、其時はどふやらし
た詞の間違ひでつい申た我等一生の
粗忽、武士がコレ手をさげる眞びら
く、假令其元が物馴れたお人なり
やこそ外々の狼藉者で見さつしやれ
此師直眞ツ二つこはやく有やうは
其節貴殿の後かげ手を合して拜まし
た、アハ、ア、年寄るとやくたい
く年にもんで御免く、コレサ
く武士が刀を投げ出し手を合す、

是程に申すのを聞入れぬ貴公でもな
いはさ、とかく幾重にも誤りく、
件内ともくにお詫くと、金が言
はする追従とは夢にもしらぬ若狭之
助、力きみし腕も拍子抜、今さら抜
に抜かれもせず寝刃合せし刀の手
前さしうつむきし思案顔小柴のかげ
には本藏が臉もせずまもり居る、ナ
ニ件内此鹽谷けなせ遅い、若狭之助
殿とはきつい違ひ、扱々不行儀者、
今において頬出しせぬ主が主なれば
家老で候迎諸事に細心のつくやつが
一人もない、イヤく若狭之助殿御
前へ御供致せ、サアお立ちなされ、
サアサア師直め誤つておるぞ、コリ
ヤ爰な粹めく粹様めイヤ若狭之助
最前からちと心悪ふござる、マア先
へ何としたく、腹痛かコレサ件内
お春くお薬進じよかな、イヤく
それ程にもござらぬ、然らば少しの

内お寛御前の首尾は我等がよい様に
申し上る、件内一間へお供申せと、
主従寄つてお聲に迷惑ながら若狭之
助、是はと思へど是非なくも奥の一
間へ入りければ、ア、もう樂じやと
本藏は天を拜し地を拜しお次の間に
ぞ控へ居る、程もあらせず鹽谷判官
御前へ通る長廊下、師直呼びかけ遅
しく何と心得てござる、今日は正
七ツ時と先刻から申し渡したでない
か、成程遅なはりしは不調法、去り
ながら御前へ出るはまだ間もあらん
と、袂より文箱取出し最前手前の家
來が貴公へお渡し申くれよ、則奥か
ほよ方より参りしと渡せば受取成程
くイヤ其元の御内室は扱々心懸が
ござるは手前が和歌の道に心を寄す
るを聞き添削を頼むと有る、定て其
事ならんと押開き、さなきだにおも
きが上のさよ衣我つまならぬつまな

重ねそ、ハア是は新古今の歌、此古歌に添削とはム、ノ、ノと思案の内我戀の叶はぬ證、倍は夫に打ち明しと思ふ怒をさあらぬ顔、判官殿此歌御らふじたでござらふ、イヤ只今見ました、ム、手前が讀のをいかにも、アノ貴殿の奥方はきつい貞女でござる、ちよつと遣はさるゝ歌が是じやつまならぬつまな重ねそ、ア、貞女、ア、其元はあやかり者、登城も遅なはる筈の事、内に斗りへばり付てござるによつて御前の方はお構ないじや、と當こする雑言過言、あちらの喧嘩の門違ひと判官さらに合點行かず、むつとせしが押しづめ、ハ、ハ、ハ、コレハノ師直殿には御酒機嫌か、御酒參つたの、いつもらしやつた、イヤいつ呑ました御酒下されても呑いでも勤る所はきつと勤る、貴公はなぜ遅かつたの御酒參

つたか、イヤ内にへばり付いてござつたか、貴殿より若狭之助殿ア、格別勤られます、イヤ又其元の奥方は貞女といひ、御器量と申、手跡は見事御自慢なされむつとなされなうそはないはさ、今日御前にはお取込み手前逆も同前、其中へ鼻毛らしいイヤ是は手前が奥が歌でござる、それ程内が大切なら御出御無用物體貴様のやうな内に斗り居る者を井戸の鮎だといふ喩が有、これや後學のため聞て置かしゃい、彼の鮎めがわづか三尺か四尺の井の中を天にも地にもない様に思ふて不斷外を見る事がない、所に彼井戸がへに釣瓶に付てあがります、それを川へ放しやると何が内に斗り居るやつじやによつて、悦んで途を失ひ彼方の橋板では鼻柱をびしやり又此方の橋板では鼻柱をびしやりに、びりノノノと死

にまする、サ彼の鮎か鮎よノノ貴様も丁ど鮎と同じ事ハ、ハ、鮎だノノ鮎士だワと出ほうだい判官腹にすへかね、こりやこなた狂氣めさつたかイヤ氣が違ふたか師直、ムヤこいつ武士を捕へて氣違ひとは、出頭第一武藏守高野師直、ム、すりや先方よりの悪言はすれや本性よな、くどいノノ又本性なりやどふする、ヲ、かうすると抜討ちにまつこうへ切り付くる、眉間の大疵是はと怯む身のかはし烏帽子の頭二つに切れ又切りかゝるを抜けつくゞりつ逃廻る折りも有れ、お次に控へし本藏走出で押しとゞめ、コレ判官様御短慮と抱とむる其隙に師直は鎧をさしてこけつ轉びつ逃行けば、己れ師直眞二つ、放せば本藏放しやれと、せり合うち鎧も俄に騒出し家中の諸武士大小名押へて刀もぎ取るやら師直を介抱やら上を



裏門の段

竹本さの太夫 鶴津友麿太若 竹本津麿太若 鶴津寛太若 豊澤友太郎

人形

早野勘平 吉田玉幸
 こし元 おかる 吉田光之助
 驚阪伴内 吉田玉徳
 取 卷 大 ぜ い

下へと。

(床本) 裏門の段

立騒ぐ表御門裏御門兩方打たる館の騒動提灯ひらめく大騒ぎ、早野勘平うろ／＼眼走歸つて裏御門碎けよ、破よと打たゞき大聲上、鹽谷判官の御内早野勘平主人の安否心もとなし愛明けてたべ、早く／＼と呼はつたり、門内よりも聲高に御用有らば表へ廻れ、爰は裏門成る程裏門合點表御門は家中の大勢早馬にて寄付かれず、喧嘩の様子は何んと／＼、喧嘩の次第相濟んだ、出頭の師直様へ慮外致せし科によつて鹽谷判官は閉門仰せ付けられ、綱乗物にてたつた今歸られし、と聞くよりハアなむ三寶おやしきへと走りかゝつて、イヤ／＼閉門ならば館へは猶歸られじと行きつ戻りつ思案最中、腰元お

かる道にてはぐれ、ヤア勘平殿様子は残らず聞きました、コリヤ何んとせふどふせふと取付き歎くを取て突退、エ、めろ／＼とほへ頬、コリヤ勘平が武士は捨つたはやいもふ是迄と刀の柄、コレ待つてくだされコリヤ狼狽てか勘平殿、ヲ、うるたへた是が狼狽ずに居られふか、主人一生懸命の場にも有合はず、剩へ囚人同然の綱乗物、お屋敷は閉門、其家來は色にふけり御供にはづれしと人中へ兩腰ざしで出られふか、爰を放せ、マ、マ、待つて下さんせ、尤じや道理ぢやが、そのうるたへ武士には誰がした、皆わしが心から死ぬる道ならお前より私が先へ死なねばならぬ、今お前が死んだらば、誰が侍じやと譽ます。爰をとつくり開き分けて私が親里へまづきて下さんせとゞ様も、かゞ様も在所でこそあれ

頼もしい人、もふかう成た因果ぢやと思ふて女房のいふ事も聞いて下され勘平殿と、わつと斗りに泣しづむそふじや、もつともそちは新參なれば委細の事は得しるまい、お家の執權大星由良之助殿いまだ本國より歸られず、歸國を待つてお詫びせん、サア一時なり共急がんと身拵へする所へ、鶯坂件内家來引連れかけ出、ヤア勘平うぬが主人判官師直様へ慮外を働き、かすり疵負せし科によつて屋敷は閉門、追付け首が飛は知れた事、サア腕廻せ、つれ歸つてなぶり切り、かくごひろげと、ひしめけば、よい所へ鶯坂件内、己れ一羽で喰ひたらねど勘平が腕の細ねぶか料理鹽梅くふて見よ、イヤ物ないはずな家來共、畏まつたと兩方より捕つたとかゝるを、まつかせとかいくど

り兩手に兩腕捻じ上、はつし〜と

蹴かへせば、かはつて切り込む切つ先を刀の鞘にて丁とうけ、廻つてく

るを櫛と柄にてのつけにそらし、四人一所に切りかゝるを右と左りへ一時に田樂返しにばた〜と打ちすへられ、皆ちり〜に行く後へ、件内いらつて切りかくるを立ばづしそつ首握り大地へどうどもんどり打たせ、しつかと踏付け、サアどうせふと、こつちの儘突ふか、切らふかなぶり殺しと振上る刀に絶つて、コレ〜そいつ殺すと、お詫の邪魔もふよいわいなと留る間に足の下をばこそ〜と尻に尾のない鶯坂は命から〜逃て行く、エ、残念〜、去りながら、きやつをばらさば不忠の不忠、一先づ夫婦が身を隠し、時節を待つて願ふて見ん、最早明け六ツ東がしらむ、横雪にねぐらを離れ飛からず、かはい〜女夫づれ、道は

急げど後へ引く、主人の御身いかゞぞと案じ行こそ浮世なれ……。

(床本) 道行旅路の嫁入り

浮世とは誰いひそめて、あすか川扶持も知行も瀬とかはり、よるべも浪の下、人に結ぶ鹽谷のあやまりは戀のかせ杭、加古川のむすめ小浪が言號、結納もとらず其儘にふり捨られし物思ひ、母のおもひは山科の掣力彌をちからにて住家へおして嫁入も世にありなしの義理遠慮、こしもとつれず乗物もやめて親子のふたりづれ、都の空に心ざす雪のはだへもさむそらは、寒紅梅の色をへて、手さき覺へずこゝへ坂、さつたとうげにさしかゝり見かへれば、富士のけふりの空に消行衛もしれぬ思ひをばはらす嫁入の門火ぞと、祝ふて三保の松ばらに、つゞくなみ松街道を、



道行旅路の嫁入

妻 戸 無 瀬

(竹本相生太夫)

娘 小 浪

(竹本南部太夫)

ッ

(豊竹辰太夫)

(竹本津磨太夫)

(豊竹駒若太夫)

(豊竹松島太夫)

せましとうつたる行列は、たれとし
らねど、うらやまし、ア、世が世な
らあのごとく一度のはれと花かざり
だてを駿河の府中過、城下すぐれば
氣さんじに母のこゝろもいそ〜と
二世のさかづきすんで後、閨のむつ
ごと、さゝめごとと親ならず子しらず
と、つたのほそ道もつれあひ、男松
の肌にびつたりとしめてからみし新
枕、女夫が中の若縁り、抱て寝松の
千代かけて替るまいぞの陸言は嬉し
からふとほのめかす、アノ母さまの
さし合な脇へこかくしてまり子川、
宇都の山べのうつゝにも夢にも早ふ
大井川、水のながれと人ごゝる都の
花にくらぶれば、日影の紅葉色づい
て、つい秋がきて小男鹿の夫ゆへな
らば朝夕にしん苦するの何の其、
此拍手のうら若き二人が中にやゝ産
んで、ねん〜こころゝんやねん〜

が守はどこへいた、どことは知た其
人に逢ふて恨を何とマアどう言てよ
からふと、しんき嶋田のうさはらし
我身のうへをかくとだに人しらすか
の橋こへて、行ば吉田やの赤坂のま
ねく女のことゑぞろへ、縁をむすばゞ
清水寺へまいらんせ、音羽の瀧にざ
んぶりざ、毎日そふいふて拜まんせ
そふじやいな、しゝきがんかうがゝ
いれいにうきう神樂太鼓にヨイコノ
ゑい、こちに晝寝をさまされた都殿
御にあふて、つらさがゝたりたやそ
ふとも〜、もしも女夫とかゝりゝ
ならば伊勢様の引合せ、鄙びたうた
も身にとつて、よい吉左右に鳴見が
た、熱田のやしろあれかとよ、七里
のわたし帆をあげて鱸びやうしそろ
へてヤツシツシ楫とる音はずむし
か、イヤきり〜す鳴や霜夜とよみ
たるは小夜ふけてこそくれまでと、

鶴澤友衛門造

野澤八六造

豊澤團伊三郎

鶴澤清友

豊澤吉龍藏市

人形

娘小浪 桐竹紋十郎
妻戸無瀬 吉田文五郎

かぎりあるふね、いそがんと母がは
しれば娘もはしり、空のあられに笠
覆ひ船路のとも後や先しやう野龜
山、せきとむるいせと、あづまの別
れ道、驛路のすゞの鈴鹿こへ、あひ

手にすへて、やがて大津や三井寺の
ふもとを越て山科へほどなきさとへ
いそぎゆく。

(床本) 山科閑居の段 (前)

の土山雨がふる、ふり見ふらずみ定
めなき旅はいろ／＼うきが中、あな
たの松蔭花やかに臺笠立笠大鳥毛行
列揃へぼつ立る武門の晴をあり／＼
とうつすや田子の浦人が聲面白く手
をたゞき、富士の白雪朝日でとける
娘嶋田は寝てとく帯のしんから底か
ら戀にや夜も日も明ぬ物じやとな、
テササかはいさが増わいな、梅の蒼
と戀仕の文はひらく間を待兼山の眞
實せい文色にや憂身をつくす物じや
とな、サアサ可愛さが増わいな、う
かれて歸る里わらは、みなくちの葉
にいひはやすいしべ、石場で大いし
や小石拾ふて我夫となで川さすりつ

人の心の奥深き山科の隠れ家を尋ね
て爰に來る人は加古川本藏行國が女
房となせ、道の案内の乗物をかたへ
に待せ、只一人刀脇差さすが、げに
行儀亂さず庵の切戸頼みませう／＼
と言ふ聲に響はづして飛で出る昔の
奏者今のりん、どうれといふもつか
うど成り、ハツ大星由良之助様お宅
は是かな、左様ならば加古川本藏が
女房となせでござります、誠に其後
は打絶ました、ちとお目にかゝりた
い様子に付き逢々參りましたと、ノ
コレ傳へられて下されといひ入れさ
せて、表の方乗物是へと鼻寄せさせ
娘爰へと呼び出せば、谷の戸明けて



山科閑居の段

前 竹鶴本相生太夫
竹澤清二郎
後 竹澤織太夫
豊竹呂太夫
豊澤新左衛門

人形

妻戸無瀬 吉田文五郎
娘小浪 桐竹紋十郎
下女おりん 吉田玉男
妻お石 桐竹政龜
大星力彌 吉田文二郎
加古川本藏 吉田玉藏
大星由良之助 吉田榮三

鶯の梅見付けたるほゝ笑顔まぶかに着たる帽子の内、アノ力彌様のお屋敷はもふ爰かへ、わしや恥かしいと媚かし、取散す物片付けて先づお通りなされませと下女が傳へる口上に駕の者皆歸れ、ヲサ、御案内頼みますといふもいそぐ、娘の小浪母に付き添座に直ればお石しとやかに出むかひ、是はくお二方共よふぞや御出、とくよりお目にもかゝる筈お聞き及びの今の身の上、お尋ねに預かりお恥しいあの改まつたお詞お目にかゝるは今日始めなれど先達て御子息力彌殿に娘小浪を言號致したからはおまへなり、わたしなりあいかひ姑同志御遠慮に及ばぬ事、是はく痛入る御挨拶、殊に御用しげい本藏様の奥方寒空といひ思ひがけない御上京がとなせ様はともあれ、小浪御察ヲ、さぞ都めづらしからふの、祇園清

水智恩院、アノ大佛様御らうじたかへ、金閣寺拜見あらばコレニよい傳が有るぞへと、心置なき挨拶に只あいも口の内、帽子まばゆき風情なり、となせは行儀改めて今日參る事餘の儀にあらず、是成る娘小浪言號致して後、御主人鹽谷殿不慮の儀に付由良之助様力彌殿御所在もさだかならず、移りかはるは世のならひ替らぬは親心とやかくと聞き合せ此山科にござる由承りましたゆへ、此方にも時分の娘早ふお渡しヲホ、申たさモ近頃押し付けがましいが夫も參る筈なれど出つ使に隙のない身の上、此二腰は夫が魂是をさせば則ち夫本藏が名代とサ、わたしが役の二人前、由良之助様にも御意得まし祝言させて落付たい、幸ひけふは日柄もよし御用意なされ下さりませと相述る、是は思ひもよらぬ仰折惡ふ夫

由良之助は他行、去りながらもし宿におりましてお目にかゝり申さふならば御親切の段千萬黍ふ存じまする言號致した時は、故殿様の御恩に預り御知行頂戴致し罷りある故本藏様の娘御も貰ひませう、ヲ、然らばくれうとサ言ひ約束は申したれ共、只今は浪人、人遣ひ迎もござらぬ内へいかに約束なれば迎大身な加古川殿の御息女、世話に申す提燈に釣鐘つり合はぬは不縁の元ハテモ結納を遣したと申すではなし、どれへなりと外々へ御遠慮なふ遣はされませとサ申さるゝでござりませふと聞てはつとは思ひながら、アノまあお石様のおつしやる事わいの、いかに卑下なされう迎本藏と由良之助様身上が釣合はぬとな、コレそんならば申しませう、手前の主人は小身ゆへ家老を勤る本藏は五百石、鹽谷殿はサ大名

御家老の由良之助様は千五百石、すりや本藏が知行とは千石違ふを御合點で言號はなされぬかへ、只今は御浪人本藏が知行とは皆違ふてから五百石、ア、イ、ヤソリヤ其お詞違ひまする、五百石は扱置、壹萬石違ふても心と心が釣あへば、ノウ大身の娘でも嫁に取るまいサものでもないム、ヤこりや聞き所お石様、心と心が釣り合はぬとおつしやるはどの心じや、ササ、聞ふサイノ主人鹽谷判官さまの御生害御短慮とは言ひながら正直をもととするお心より起りし事、それに引きかへ師直に金銀をもつて娼諂ふ追従武士の碌を取る本藏殿二君に仕へぬ由良之助が大事の子に釣合はぬ女房は持されぬと、聞きもあへず膝立直しコレ諂武士とは誰が事様子によつては聞き捨られぬウ、がそこを赦すが娘のかはいさ

夫に負るは女房の常祝言有ふが有るまいが言號有るからは天下晴れての力彌が女房、ム、コリヤ面白い女房ならば夫がさる、力彌にかはつて此母がさつた〜と言ひ放し心隔ての唐紙をはたと引立入にける娘はわつと泣出し折角思ひ思はれて言號した力彌様に逢はせてやるとのお詞を便りに思ふてきたものを姑御の胴慾にさられる覺えはわたしやない、母様どうぞ詫言して祝言させて下さりませうと絶り歎けば母親は娘の顔をつく〜と打ちながめ〜、親の慾目かしらね共ほんにそなたの器量なら十人並にもまさつた娘、よい掣をがたと詮議して言號した力彌殿尋ねてきたかひもなう、掣にも知らさずさつたとは義理にも言はれぬお石殿姑去りはマ心得ぬ、ム、扱は浪人の身のよるべなう筋目をいひ立て有徳な

町人の聲になつて義理も法もコリヤ
忘れたな、ナフ小浪今言ふ通りの男
の性根、さつたといふを面當にほし
がる所は山々、外へ嫁入りする氣
はないか、コレ大事の所泣かず共し
つかりと返事仕や、サコレどふじや
くゝと尋る親の氣は張り弓、アノ母
様のどうよくな事おつしやります、
國を出る折とゞ様のおつしやつたは
浪人仕ても大星力彌行儀といひ器量
といひ仕合せな聲を取つた、貞女兩
夫にまみへず、譬へ夫に別れても又
の殿御を設けなよ、主有女の不義同
然、必ずくゝ寢覺にも殿御大事を忘
るゝな、由良之助夫婦の衆へ孝行盡
し夫婦中睦じい逆あじやらにも情氣
ばしめてさらるゝな、案ぜうかとして
隠さずと懐妊になつたら早速に知せ
てくれとおつしやつたを、わたしや
よう覺へて居る、さられて遊あそでとゞ

様に苦に苦をかけてどふいふでどふ
言譯が有ふ共、力彌様より外に餘の
殿御わしやいやくゝと一と筋に戀を
立てぬく心根を聞に絶兼母親の涙一
途に突詰し覺悟の刀抜き放せば、母
様は何事と押留られて顔を上げ、
何事とはくゝくゝ、エ、曲がないわ
いの、今もそなたがいふ通り一時も
早ふ祝言させ初孫の顔見たいと娘に
甘いは爺のならひ、悦んでござる中
へまだ祝言もせぬ先きに去られて戻
りました逆どふ連て遊れふぞと、い
ふてさきに合點せにや仕様もやうも
ないわいの、殊にそなたは先妻の子
わしとはなさぬ中じや故およそにし
たかと申されてはどふも生きては居
られぬ義理、此通りを死んだ後で爺
御へ言譯したもや、アノマア勿体
ない事おつしやりますわいなア、殿
御に嫌はれわたしこそ死べき筈、生

てお世話になる上に苦を見せます
不孝者母様の手にかけて、私を殺し
て下さりませ、去られても殿御の内
爰で死ぬれば本望じや、早ふ殺して
下さりませ、ヲ、よふいやつた出か
しやつたくゝよふのそなた斗り殺し
はせぬ此母も三途の友、そなたをわ
しが手にかけて、母も追付後から行
覺悟はよいかと立派にも涙とゞめて
立かゝり、コレ小浪アレあれを聞き
や、表に虚無僧の尺八鶴の巢籠り鳥
類でさへ子を思ふに科もない子を手
にかけるは因果と因果の寄合と思へ
ば足も立兼てふるふ拳を漸々に振り
上る刃の下尋常に座をしめ手を合せ
南無阿彌陀佛と唱ふる中より御無用
と聲かけられて思はずもたるみし拳
尺八も供にひつそとしづまりしが、
ヲ、そふじや今御無用と止たは虚無
僧の尺八よな、助けたいが山々で無

用といふに氣おくれし未練とな笑は
れな娘覺悟はよいかやと、又振上る
又吹出すとたんの拍子に御無用、ム
又御無用と止たは修行者の手の内
か振上げた此手の内かイ、ヤお刀の
手の内御無用、忤力彌に祝言させふ
エ、そふ言ふ聲はお石殿、そりや眞
實か誠かと尋る襖の内よりもあいに
相生の松こそめでたかりけれ、祝儀
の小謠白木の小三方目八分に携へ出
義理有る中の一人娘殺そふとまで思
ひつめたとなせ様の心底小浪殿の貞
女志しがいとをしき、させにくい祝
言さす其かはり世の常ならぬ嫁の盃
請取は此三方御用意あらばとさし置
けば少しは心休まりて扱たる刀鞘に
納め世の常ならぬ盃とは引出物の御
所望ならん、此二腰は夫が重代刀は
正宗指添は浪の平行安家にも身にも
かへぬ重寶是を引手と皆まで言はず

イヤコレ浪人と侮て價の高い二腰ま
さかのときに賣拂へと言はぬ斗りの
鞆引手、御所望申すは是ではない、
ム、そんなら何が御所望ぞ、此三方
へは加古川本藏殿のお首が乗せて貰
ひ度い、エ、そりや又なぜな御主人
鹽谷判官様高野師直にお恨み有て鎌
倉殿で一刀に切りかけ賜ふ其時こな
たの夫加古川本藏其座に有て抱き止
め、殿を支へた斗りに御本望もとげ
られず、敵は漸々薄手斗り殿はやみ
／＼御切腹、口へこそ出し給はぬ其
時の御無念は本藏殿に憎しみがかゝ
るまいか、サ有まいか家來の身とし
て其加古川が娘、あんかんと女房に
持つ様な力彌じやと思ふての祝言な
らばノコレ此三方へ本藏殿の白髮首
否と有ばどなたでも首を並る尉と姥
それ見た上で盃させふ、サアサ、
否か應かの返答をと尖き詞の理屈詰

親子はばつと差うつむき途方に暮し
（床本） 山科閑居の段（後）
折からに加古川本藏が首進上申、請
取なされよと表に控へし虚無僧の笠
ぬぎ捨てしづ／＼と内へ這入ば、ヤ
アお前はとゞ様本藏殿爰へはどふ
して其形は合點がいかぬこりやどふ
じやと咎る女房、ヤアざは／＼と見
苦しい始終の仔細は皆聞いた、そち
達にしらさず爰へ來た様子は追てサ
先づだまれ、ヤナニ其元が由良之助
殿の御内證、エ、ヲお石殿よな今日
の時誼斯くあらんと思ひ妻子にも知
せず様子を窺ふ加古川本藏案に違は
ず拙者が首鞆引出にほしいとな、ハ
、ウハ、ウハ、ハ、ハ、ハ、いやはや
そりや侍の言ふ事さ主人の怨を報は
んと言ふ所存も無く遊興にふけり大
酒に性根を亂し放埒なる身持日本一

のあほうの鏡蛙の子は蛙に成る親に劣らぬ力彌めが大はけだはいうろたへ武士のなまぐらはがね此本藏が首は切れぬ馬鹿つくすなと踏碎く破三方のふち放れ、こつちから聲にや取らぬ、ヤアちよこざいな女めと言せも果ずヤア過言なるぞ本藏殿浪人の鎗刀切か切れぬか鹽梅見せふ、不祥ながら由良之助が女房望む相手じやサア勝負くくくと裾引上げ長押にかけたる鎧追つ取り突かゝらんずその氣色是は短氣なマア待つてととゞめ隔つる女房娘、コリヤ邪魔ひろぐなとあらけなく右と左へ引退る間も有らせず突かくる鎗のしほ首引つ掴みもぢつて拂へば身を背け諸足ぬわんとひらめかす、はむねを蹴つて蹴上ぐれば拳放れて取落す鎗奪はれじと走寄る腰際際引つかみどぶと打付け動かせず、膝にひつ敷強氣の

本藏、しかれてお石が無念の齒がみ親子ははあゝあやぶむ中へかけ出る大星力彌、捨たる鎗を取る手も見せず本藏が馬手のあばら弓手へ通れと突通す、うんと計りにかつばとふす、コハ情なやと母娘取付き歎くにも懸ずとゞめさゝんと取直す、ヤア待て力彌早まるなと、鎗引とめて由良之助手負に向ひ一別以來珍らしや本藏殿御計略の念願とゞき聲力彌が手にかゝつて嘸本望でござらうのと、星をさいたる大星が詞に本藏目を見開き主人の鬱憤を晴さんと此程の心遣ひ遊所の出合に氣をゆるませ徒黨の人数に揃ひつらん思へば貴殿の身の上は本藏が身に有べき筈、當春鶴ヶ岡造營の砌り主人桃井若狭之助、高野師直に恥しめられ、以てのほか御憤某を密に召され、まつかうくの物語り明日御殿にて出くわせ

ば一刀に討留ると思ひ詰たる御顔色とめても止らぬ若氣の短慮、小身故師直に賄賂薄きを根に持つて恥しめたと知たる故主人に知らせず不相應の金銀衣服臺の物、師直へ持參してエ、心に染ぬ詔ひもコレ主人の大事と存ずるから賄賂負せあつちから誤つて出た故に切るに切られぬ拍子抜け主人の恨もさらりと晴れ相手かはつて鹽谷殿の難儀となりしは即ち其日相手死すば切腹にも及ぶまじと抱留たは思ひ過した本藏が一生の誤りは娘が難儀と白髪のコ、コレ此首擧殿に進ぜたき女房娘を先へ登し、媚詔ひしを身の科にお暇を願ふてなコレ道をかへてそち達より二日前に京着、若いおりの遊藝が役に立つた四日の内こなたの所存を見ぬいた本藏、手にかゝれば恨も晴れ、約束の通り此娘力彌に添せて下さらば未來

永劫御恩は忘れぬ、コレ手を合して頼み入る忠義にならでは捨ぬ命、子故に捨る親心、推量あれ由良殿と言ふも涙にむせ返れば妻や娘は有にも有れずほんにこうとは露知らず死おくれた許りにお命捨るは餘りな冥加の程が恐ろしい赦して下され父上とかつばと伏して泣叫ぶ、親子が心思ひやり大星親子三人も供にしをれて居たりしがヤ々本藏殿君子は其罪を悪んで其人を悪まずと言へば縁は縁恨はと格別の沙汰も有べきにと嘸恨みに思はれんが所詮此世を去る人底意を明て見せ申さんと未前を察しておく庭の障子さらりと引明れば雪をつかねて石塔の五輪の形を二つまで造り立しは大星が成行果を現はせり、となせはさかしくム、御主人の怨を討て後二君に仕へず消るといふお心のアレあの雪力彌殿も其心で娘

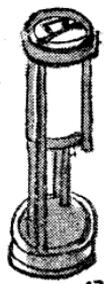
を去たの胸慾は御不便あまつてお石様恨だがわしや悲しいア、コレ々々となせ様のおつしやる事わいの玉椿の八千代までもと祝はれず後家に成嫁取つた此様なめでたい悲しい事はない、ア、コレ々々斯云事がいやさになむごうつらふ言たのが無僧かつたでござんしよの、イ、エイナわたしこそ腹立まム町人の聲に成つて義理も法も忘れたかと言ふたのが恥かしいやら悲しいやら、どうも顔が上られぬわいなお石様、ア、コレ々々となせ様、氏も器量も勝れた子何として此様に果報拙ない生れやと聲も涙にせき上る、本藏あつき涙を押へ、ハツア、嬉しや本望や吳王を諫めて誅せられ辱めをわらひて吳子胥が忠義は取るに足らず忠臣の鑑とは唐土の豫讓日本の大星昔より今に至るまで唐と日本にた

つた二人其一人を親に持つ力彌が妻に成つたるは女御更衣に備はるよりコリヤ百倍勝てそちが身は武士の娘の手柄者手柄な娘が舞殿へお引の目録進上と懐中より取出す力彌取つて押し戴き、開き見ればコハいかに目録ならぬ師直が屋敷の案内一々に玄關長屋侍部屋水門物置柴部屋まで繪圖に委しく畫付けたり、由良之助はつと押戴き、ヘエ有難し々徒黨の人数は揃へ共案内知れざる故發足もナコレ是迄は延引せり、此繪圖こそは孫吾が秘書我爲の六韜三略兼て夜討と定めたれば繩梯子にて塀を越へ忍び入には椽側の雨戸はづせば直に居間、爰をしきつて、コレ々々々々斯せめてと親子が悦び手負ながらもぬからぬ本藏、アイヤ々夫は僻言ならん用心きびしき高野師直障子襖は皆尻ざし雨戸に合榫合榫こぢ

てもはづれずかけやにてこぼたば音
して用意せん、サアサ、サア／＼
／＼それいかゞ、ヲ、夫にこそ術有
り凝つて思案にあたはずと遊所より
の歸るさ、思ひ寄たる前裁の、アレ
／＼アノ雪持竹、雨戸をはづせ我工
夫仕様を爰にて見せ申さんと庭に折
しも雪深くさしにも強き大竹も雪の
重さにひいわりとしはりし竹を引き
廻して鴨居にはめ雪にたはむは弓同
然此如く弓を拵へ弦を張り鴨居と敷
居にはめ置てサアサ、一度に切て
放つ時はまづ此様にと積つたる枝打
拂へば雪散て延るは直なる竹のちか
ら鴨居たはんで溝はづれ障子残らず
ばた／＼本藏苦しき打忘れ、ハ、ハ
、ハ、ハ、したり／＼計略といひ義
心といひか程の家來を持たがら了簡
も有べきにあさきたくみの鹽谷殿口
惜き振舞やと悔みを聞に御主人の御

短慮成る御仕業今の忠義を戦場の御
馬先にて盡さばと思へば無念にとぢ
ふさがる胸は七重の門の戸を洩るは
涙ばかりなり、力彌はしづ／＼おり
立て父が前に手をつかへ本藏殿の御
芳志により敵地の案内知たる上は泉
州堺の天川屋義平方へも通達し荷物
の工面仕らんと聞もあへず何さ／＼
山科に有事隠れなき由良之助人數集
めは人目あり一先堺へ下つて後あれ
から直に發足せん其方は母嫁となせ
殿諸共に後の片付け諸事萬事何もか
も心残りのなき様に、ナナコロヤ翌
日の夜舟に下るべし、我は幸ひ本藏
殿の忍び姿を我姿と袈裟打掛けて編
笠に恩を戴く報謝返し未來の迷ひ晴
さん爲今宵一夜は嫁御寮へ身がなさ
けのれんば流し歌口しめして立出れ
ば兼て覺悟のお石が歎き、ア、コレ
申御本望をと斗りにて名残惜しさの

山々を言はぬ心のいちらしき手負は
今を知死期時とゞ様申とゞ様と呼べ
どこたへぬ斷末魔親子の縁も玉の緒
も切つて一世の憂別れわつと泣母泣
娘ともに死骸にむかひ地の回向念佛
は戀無常出行く足も立止り六字の御
名を笛の音に南無阿彌陀佛なむあみ
だ是や尺八ぼんのふの枕ならぶる追
善供養、閻の契は一夜ぎり心残して
立出る。



酒屋の段

艶容女舞衣

酒屋の段

今ごろは半七さんのきはりりで知られてゐる世話物の粹であります。上中下三巻からなつてゐますが、酒屋は下の巻の上鹽町の段の切になつてゐ

(床本) 酒屋の段 (中)

させやうとすると、半七の親の半兵衛が拒む處から事件が展開されて、お園の貞節や、捨兒のお通の守袋から現はれた遣書で一家が悲嘆するといふ人情の機微を穿つた場面がそれからそれへと續く名作であります。

中
豊竹 豊竹 豊竹
本澤 本澤 本澤
播路 播路 播路
伊太 伊太 伊太
三夫 三夫 三夫
切
竹本 竹本 竹本
鍛太 鍛太 鍛太
鶴澤 鶴澤 鶴澤
寛治 寛治 寛治
延

人形

丁稚 長太
半兵衛 女房
美濃屋 三勝
茜屋 半兵衛
五人組
親宗 岸組
嫁お 園岸
婿お 半七
桐竹 紋昇
桐竹 政龜
吉田 榮三郎
吉田 玉市
吉田 多三郎
吉田 小兵吉
吉田 文五郎
吉田 文之助
桐竹 紋之助

八民平七の合作です。この作の以前に寶永年間に同じ豊竹座で「笠屋三勝廿五回忌」と名題して上場されてゐます。この段の内容を申し上げますと茜屋の悴半七がお園といふ女房が有るのにもかゝらず昔馴染の美濃屋の三勝といふ藝妓に迷ひ遂に人殺しまでする。お園の父宗岸は聲の放蕩を怒つて一度娘を連れ戻したが再び考へるところがあつて茜屋へ復歸

古郷は大和五條に名のみにて今は浪花の上鹽町、格子造りも小つくり三輪の山本ならね共、杉立軒の酒林味淋、白酒、焼酎の看板もからい渡世なり賣場に居眠る丁稚の長太酒壺であたまコツツリ、アイタ、エ、エ、といつじやい人のあたまをたゞきをつたは、どいつじやい人のあたまをたゞきをつたは、どいつじや、どいつアたれもたたいたのじやなかつた、おれがでに打たのじや、エへ、ヨウ何じや、又彈は隣

の須賀市が稽古じやそふな何ぞ面白
い事をうたへばよいがな

「かはいらしい前髪をあいそもこ
つそり坊様にせう事もなきうきふし
のこゝばつかりに日はてるまいし、
ハア萬年草をやらかしおるコリヤ面
白いよふ〜ふ味い事〜どふぞ長
ふ頼みまずぞへと、體を横に寝はら
ばい餘念たはいも納戸より立出る此
家の女房、ヤイ長太よ其なりは何じ
や、今日は親父殿を代官所からお召
で何事が起つた事と内でとやか〜案
じて居るに、其氣も付かぬたわけ者
エ、たしなみをれと叱られて俄にし
よげりましくしと水ばなすゝるばか
りなり、早や日も西に片影を歩む姿
は一風有、二つか三つの子を抱き酒
やののれん押明ておじやまながら酒
を少々下さりませと、内へは入れば
何じや酒くれ、へ、ンこちの内には

る酒はないは、通りや〜、イヤ私
は物もらひでは御座んせぬ、よい酒
が一升買たう御座んすと言に、女房
立寄てエ、又しても阿呆奴が粗相ば
つかりぬかしおる、お赦しなされて
下さりませ、そしてよい酒とおつし
やるは銘酒でもあげませふか、アイ
遣ひ物に致しますのじや程に随分よ
いのを内方の塗樽に一升入て下さり
ませ、ヲ、お遣ひ物になさるなら相
生がよからふと、ほこりを拂ふ塗樽
に上具さし込み小きんの呑よい程ら
いに詰樽の口にべつたり銘酒の書付
手早に張て差出せば、ヲ、相生とは
芽出度銘酒、價はそこへ宜しふと、
おあし取出し差出し、近頃わりなき
事ながら内方のお衆に此樽持せて、
一寸そこ迄やとはかして下さりませ
ぬか、ヲ、それは何よりお安い事、
コリヤ〜長太よ、此女中様に付て

往て樽の明た時取りに行く様に先様
をよふ覺えて戻らふぞや、どこ迄な
りと連てお出でなされませ、ヲ、そ
れはマア〜お婢しや、お禮は戻り
に申ませふ、こなさんいかい太儀ぢ
やの、と挨拶とり〜ぬり樽を長太
に持せ出て行く、引違て主半兵衛老
の五調氣はいらくら急ぐ足元我家の
軒跡に年寄五人組打連伴ひ立歸れば
ヲ、親父殿戻らしやつたか、ヲ、コ
レハ〜お年寄様、どなたも〜い
かい御苦勞、思ひがけない代官所の
お召故何事が起つたかと今朝からわ
しは案じつゞけ氣遣な事じやござら
ぬか、ア、イヤ〜お内儀さして氣
遣な事じやござらぬ、高がこゝの半
七が山の口で人殺したア、イヤ〜
申お宿老様、半七が人殺し、ム、サ
ア、悴めが一頃とは違ふて、モ、ぞ
け出した故の勘當、ムサ、其挨拶

は忝いけれど、先其分になされて、
 ナア、何も仰有て下さりませぬ、ヤコ
 レ、女房共定めて案じて居やつたで
 あるが、何も氣遣な事じやなかつた
 が皆様は嘸御退屈、御酒でも爛して
 上ましやと夫が詞に悦ぶ女房、それ
 はマア、目出度い事身に覺はなけ
 れ共、時の災難でどんな事が起ふか
 と案じた程は悦ばぬ皆様の草臥休め
 肴はなくと御酒一つと立を留めてア
 、コレお内儀イヤモよしにさつしや
 れ、下宿で支度して酒もたんと呑ん
 で居れど、トットモ理に入つたかし
 て酔も出ぬ、ア、氣の毒な事では有
 と宿老の投首、何とやら様子有げの
 折柄に上の町からおい、と泣て戻
 る阿呆の長太片手に酒樽片手に抱く
 稚子も俱に泣々我家の内、エ、又阿
 呆めが餘所の子にせぶらかされたナ
 エ、よい年をして何のほへさま、た

しなみおれと叱られて、イ、エこち
 やせぶらかされやせぬけれどな、さ
 つきの女がおれを辨天様の中へつれ
 て往てちよつと其所まで往てくる程
 に此子をちよつとの間抱て居てくれと
 言ふてナそしてから、何處へいたや
 ら、何ぼ待ても戻らぬによつてナ金
 比羅様や八幡様や生玉の中をあつち
 へいたり、こつちへいたり尋ねる中
 に此子が泣によつて、それでおれも
 悲しいワア、、、、ヤイ、何をぬ
 かすやら、それはおのれが阿呆じや
 によつてやつぱり辨天の中に待て居
 ればよい事を、エ、定めしこゝへ尋
 ねて見へるであると、泣子をすかし
 抱取り、ヲ、よい子じや姫御前の子
 じや、そふなと長太が提し樽打なが
 めハア替つた書付コレ見やしやれ、
 親父殿と樽さし寄れば、ハテ此廣い
 大坂同じ名もあらいでとは言ひつゝ

立寄眉にしは、ム、進上、上鹽町馬
 場先にて茜屋半兵衛馬場先で茜屋半
 兵衛といふはこちの事じや、見りや
 こちの塗樽コリヤ様子でも有るか、
 サイノ様子と言はさつきに見知らぬ
 女中が酒買ひに来て、アノ長太を雇
 ふて連れていかれたが其樽に此書付
 ヤア何じや見知らぬ女中が酒買ひに
 來た、サイノ其時何の譯も言ずアノ
 阿呆を雇ふて、ム、ハテ、めんよふ
 な、とふしぎに立寄五人組、こゝら
 がお宿老の分別所と、言ふても詰る
 塗樽の禿たあたまをかたむけり、半
 兵衛膝を丁と打ち、ム、よめた、コ
 リヤ捨子じやはい、ヤア捨子とは何
 を證據、ハテこちの内て買ふた酒に
 進上、茜屋半兵衛様と書付其子を阿
 呆に抱して何處やら行方の知ぬは疑
 もない捨子、此半兵衛を見込養育頼
 む印の此酒何とそふじや有まいか、

ム、成程く言はつしやればそんな物、何のよしみもない人が洒くれば

ふ筈がない、是が捨子なら何とまあ利口な仕様じやござりませぬか、ソレイノみかん籠もいらす、イヤモ新らしい捨子の趣向、ヤコイツワ一番はやりませふはいの、シタがコリヤ捨子のつゝもたせじやないかや、ハテ何と致しませふ、こふ突附られた事じやもの養ふてやらざなりませまい、おゝそれはいかに後生じやが其かわり其子について違論妨ある時は何時でも町が證人じや、サ、何と皆の衆是をはねにモウいのふじや有まいか、イカニモ左様と立上れば半兵衛夫婦つどく今日御苦勞御世話の禮、何やら物を言たげにふり向宿老を目でとゞめ稚子いだきおぢうばは一問へ。

(床本) 酒屋の段 (切)

M こそは入相の、鐘に散り行く花よりも、あたら盛を獨寝の、お園を連て爺親が、世間構はぬ十徳に、圓い天窓の光りさへ、子故に暗む黄昏時、主の妻は灯をともし、表を締に急々と、出合頭に、詞ホ、是はく宗岸様、其處に居やるはお園じやないか、アノ母様、お替りもござりませぬかと、言ふ挨拶も何處やらに、疵持つ足の踏途さへ、低き敷居も越乗る、宗岸は遠慮なく、詞半兵衛殿お宿にかと、娘を連て打通れば、妻は門の戸引立て、サアく先づお上り成されませと、奥底も無き詞の中夫と聞くより半兵衛が、一問を出る澁々顔、詞娘を連て行かれたからは此方の内に用は無い筈、何の爲にござつた事と、針持つ詞に妻は氣の毒

詞イヤもふ人様に追従云はぬ偏屈な我夫、必ずお氣に障られて下さいますな、此間の嫁女の歸つて居られまして、いかにお世話でござりませふナンノく、半兵衛殿の立腹は皆尤も、三勝とやらに心奪はれ、夜泊りして女房を嫌ふ半七、所詮末の詰らぬ事と、無理に引立行つたのは、娘に引を取らずまい爲儂が氣迷ひ、夫から思案爲るに付け、唐も倭も一旦嫁に遣つた娘、嫌はれふが如何爲ふが、男の方から追出すまで、取戻すと云ふ理屈は無い筈、コリヤ宗岸が一生の仕損ひと、悔んでも跡の祭り園めも晝夜泣き悲しみ、朝夕も勸まねば、若や病が起らふかと、見て居る親の心は闇、儂も天滿に年古ふ住んでおれば、人に理屈も云ふ者なれど、誤りは詫ねば成らぬと、年寄の顔押拭ふて來ました、何彼のごとは

了簡して、今までの通り嫁じやと思ふて下され、これ頼みます御夫婦と謝り入つたる挨拶に、お園もうぢうぢ、手を支へ、爺様の一徹で、無理に連れられ歸りしが、一旦殿御と極まつた半七様に嫌はれるは皆私が不調法、鈍に生れた此身の科、詞今から随分お氣に入る様に致しませう程に猶且元の嫁娘と、仰しやつて下さりませ、お二人様と、後は詞も涙なり詞オ、何のマア、其方さへ其心なら此方は變らぬ嫁姑、ノウ親父殿、そらうぢや無いか、イヤそらうぢやない、昔唐に例が有る、太公望とやらいふ人の妻、夫に隙取り月日を経て、詔言に來りし時、鉢の水を大地に覆させ、其水を鉢へ入よ、元の如く夫婦に成らんと、太公望が云はれたと、日外講釋で聞いて來た、夫と丁度同じ事、此方の方から無理隙取つて、

今更嫁と思へとは、何時まで云つても返らぬ事、口詞叩かずと、早う連て退しやれ〜と、膠もしや〜りも納戸口、顔を背けてゐたりける、詞オ其立腹は尤も〜、が重々不調法は、此天窓に免じ了簡して、何卒嫁に、否でござる、忤めも勘當したれば、嫁と云ふべき者もない筈、サア夫も懲しめの爲當座の勘當、イヤ當座でない、七生までの勘當ぢや、ム、其又七生まで勘當した半七が代りに、此方は何で繩に掛つた、ヤアサア半七とは親でも子でも無い此方が、今日代官所で何の爲に、縛られて戻らしやつたと、思ひも寄らぬ宗岸が、詞に惻り驚く、女房、嫁も俱々立寄つて、肌押脱せば半兵衛が、小手を緩めし羽搔締、ノウ情無や何事と、嫁はうろ〜、女房も取付き歎けば宗岸が、詞イヤ未だ驚くこと

がある、聲の半七は人殺し、お尋ね者になつたわいのと、聞くより二人は又惻り、夫は何故如何した譯、様子を聞かしてコレ〜半兵衛殿と問へども更に返答は差俯いて詞なし、宗岸涙の目をしばた〜き、詞一昨日の晩山の口で、善右衛門を殺したは茜屋の半七と、噂を聞いた時は、驚くまいか惻りせまいか、膝も腰も抜果しが、思へば不孝者、能い時勘當さしやつて、親に難儀の掛らぬは、未だ此上の仕合と思ふたは他人の子簡、違ふた此方の縛り繩、科極まつた半七が命、一日なりと延したいと人殺しの科を身に引き受、繩掛つた此方の心は、眞實心に子を思ふ親の誠と知れば知る程、宗岸が仕損ひ、半七の身の難儀、此方も勘當して仕舞ひ、儕も娘を取戻したら、親にかゝる首綱も無い、能い事爲たと世間

から譽める人も有らうが、親と成り
舅と成るが、大抵深い縁かいのう、
斯う云ふ時宜に成つた時は、譽めら
るゝよりは笑はるゝが親の慈悲、片
時も早うと連れてきた心はのゝ一旦
嫁に遣したれば、半七が厭がるなら
ハテ尼にしてなと此内で、御夫婦の
亡き後の、香花なりとも取らして下
され、コレ手を合して頼みます、詫
言が叶はねば、引放されたと突き詰
て、短慮な心も出し居るか、案じ
過して夜の目も合ず、母親は無し唯
一人、彼女を思ふ儕が因果、此方の
縄目も半七が、科人に成つたら猶可
愛かる、譬へ又勘當が定でも久離切
つたが誠でも、眞實親子の肉縁は、
切るに切られぬ血筋の親、俺も此方
程は無けれども娘は可愛い、まして
勘當はせぬ娘、愚痴なと人が笑はふ
が俺や可愛い不便でござる、これこ

そ聞入れて給へ半兵衛殿と、是まで
泣かぬ宗岸が、堪へにこたへし溜涙
を、たくし掛たる叫び泣き、我強う
生れし半兵衛も、舅の心根思ひ遣り
オ、道理じや〜宗岸殿と跡は詞も
ないぢやくり、妻もお園も一時に、
四人が涙洪水に、樋の口開けし如く
なり。半兵衛涙の内よりもお園が顔
を打守り、何から何まで氣を付けて
孝行にして給る。斯な嫁が尋ねたと
て、最一人と有る物じや無い、世間
の人の嫁鑑、半七が事は思はぬが、
其方に別るゝ半兵衛は、能々不仕合
せ、退せとむ無い、返しとむ無い、
とは思へども、此方に置けば此儘若
後家、俺は夫が可愛い、いとしうお
ぢやる、夫で詫言聞入ぬ、了簡して
呼戻さぬ、これ嫁女、必ず酷いと恨
んでばし給んなや、一人の倅はお尋
ね者、翌日より誰を力にせうぞ。孝

行にして給はつたが、今では結句恨
めしいと、せき上げせき入る舅の脊
擦るお園も正體なく、伏沈むこそ道
理なり。半兵衛漸々顔を上げ、云は
ねばならぬ事も有れど、孝行な嫁女
の手前、胸に窒つて言ひ悪い、宗岸
殿奥の間で言ひ明さん、これお園、
其方を更々嫌ふぢやない、氣に掛け
て給るなや、舅殿へ話す中、暫く爰
にと三人は悄々奥へ泣に行く心の中
ぞ哀れなる、跡には園が憂思ひ、か
れとてしも烏羽玉の、世の味氣無
さ身一つに、結ばれ解ぬ片絲の、繰
返したる獨言、詞今頃は半七様が何
處に如何してござらうぞ、今更返ら
ぬ事ながら、私と言ふ者無いならば
半兵衛さんもお通に免じ、子まで成
したる三勝殿を、疾にも呼入れさし
やんしたら、半七様の身持も直り、
御勘當も有るまいに、思へば〜此

園が、去年の秋の煩ひに、寧ろ死んで終ふたら、斯うした難儀は出来まいもの、お氣に入らぬと知りながら未練な私が輪廻故、添臥は叶はずとも、お側に居度いと辛抱して是まで居たのがお身の仇、今の思ひに比ぶれば、一年前に此園が、死る心が付かなんだ。堪へて給へ半七様、私や此様に思ふてゐると、恨みつらみは露程も、夫を思ふ眞實心、猶彌や増る愛思ひ。詞 翌日はとうから父様に又連られて天満へ往に、半七様の不圖した果敢ない便りを聞くなれば、思ひ死に死ぬて有る、逆も浮世は立ぬ覺悟嫌はれても夫の内、此家で死ぬば後の世の若しや契りの綱にもと最期を急ぐ心根は、餘所の見る目もいちらし。斯る哀れも知らぬ子の合 泣く聲に目や覺ましけん、一間を出て、乳飲まう、乳が飲み度いおぼ

くくと、お園が膝に寄添ふ子の顔見て恟り抱き寄せ、詞 ヤア其方は美濃屋のお通じや無いか、爰へは如何して在つたと、不審ながらも抱上ぐれば、半兵衛宗岸母親も一間の内を轉び出、詞 オ、これく嫁女忝ない其心、障子の内で聞く度に、拜んばかりゐたはいの、禮云う事も澤山あれど心の急ぐは此子の事、美濃屋のお通と云はしやつたは、半七と三勝の、アイ、お二人の中に出來たお通と云ふは此子じやわいな。ヤアく親父殿聞かじやつたか、オ、聞いて居る、其又お通を、ナ、何で捨子にして此地へお越した是や理由が有らう、嬉懐か何所ぞに、書いた物でな無いか、早う尋ねて見やと言ふ内に、わくせきあくる守袋、内よりはらりと落たる一通取る間遅しと封押し切、詞 ヤア何ぢや、書置

の事と書いて有る、ヤアくこれく嫁女其方の好い目でちやつと讀や。アイく、ナニナニ十度契りて親子と成る、父の思は山よりも高きとの世の教、我身にも辨へ居候へども、其御恩も得送らず、儘ならぬ義理に擲まれて、心にも有らぬ不孝の罪お赦し下され度候、別て母様の御養育、申しお前の事でござりませぬ、能ふお聞き成されませいオ、能ふ聞いてゐますわいの。唄 聞いてゐるさの障子より、洩れ出る月は呀れど胸の闇、合詞 エ、時も時と隣の稽古、然して其跡は、何と書いて有るぞ、アイ母様の御養育海よりも深き御恵み、親父様御機嫌悪い時には、蔭になり陽になり、幾千萬のお心遣ひも、泡と消行く我難儀、人を殺せし身と成り候へば、思ひ設けぬ御別れ。詞 エ、夫なら矢張半七様は

オイノウ嫁女、善右衛門を殺しまし
たわいのふ、ハア彼善右衛門と云ふ
奴が、大抵や大概、悪い奴ぢや無い
わいの、彼んな悪者でも喧嘩兩成敗
我子の命を解死人に取らるゝと思へ
ば思へば宗岸殿、口惜いわいのゝ
無念にござると述懐涙見聞お園は
以前の剃刀、南無阿彌陀佛と覺悟の
體、是はと驚く、母、宗岸叶はぬ手
にも半兵衛は、漸々押へて、これ嫁
女、詞年寄ばかりを跡に置き、死な
うとは胴慾ぢやはいゝ。エ、これ
が死なずにゐられませうか、放して
殺して下さいせ。オ、娘、尤もぢや
ゝゝゝわい、ア老少不定の世の中
と、開流したも今身の上、みづゝ
とした若い者、義理に迫つて死ぬる
とは、ノウ半兵衛殿宗岸殿、思ひ廻
せば廻す程チエ、口惜いわいのゝ
M 鴛鴦の片羽のとぼゝと、子

に迷ひ行く小夜千鳥、無殘や半七は
今宵限りの命ぞと、三勝伴ひしほし
ほと心に掛る我子の顔、名殘にせめ
て今一目と、俱に戸口に夜の鶴、内
には夫と白髮の母、心ならねど書置
を又取上て讀む文章。詞人を殺し一
日も、生長らへる所存はなく候へど
も、お通と申す娘一人ごぞ候て、殊
にかよはき性質、不便さ餘る親心、
夫に心が引かされて、今日まで長へ
候へども所詮助からぬ身に候へば思
召も省みずお通を遣はし候まゝ、私
の小さく成しと思召され詞どれゝゝ
婆見しやいのゝ、エ、私の小さく
成しと思召され、御養育のお世話の
程くれゝゝ頼み上候。子を持つて知
る親の恩と、お通が不使いぢらしさ
に、お二人様の御恩の程、猶更此身
に浸み應へ有難存奉候。又々心掛は
親父殿の御勸當相果候後にても、お

赦し下され候様、母様宜敷お執成、
是のみ黄泉の障に御座候々々々、オ
、道理ぢや道理ぢやゝゝゝ可愛や
と泣聲洩るゝ表には、半七が身に應
へ斯る嘆きも我故と、思はゞ今更空
恐ろしく身を悔んだる男泣、袖や袂
を啣締々々、泣く音止むる憂き思ひ
此方はお園が猶涙、泣々取上ぐる書
置の、讀むも果敢なき世の中に、詞
女は其家に在つて定まる夫一人を、
頼みに思ふ者に候處、其頼みに思ふ
我等がみもち、いつしか愛想らしき
辭も掛ず、終に一度の添臥も無候へ
ども、其色目も致さずして、親達大
事夫大事と、辛抱に辛抱成され候段
山々嬉しく存じまゐらせ候、今まで
すげなふ致せし事も、更々嫌ふでは
無候へども、三勝とはそもじの見え
ぬ先からの馴染にて、子まで設けし
中に候へば互に退去も成り難く、夫

故疎遠に打過まゐらせ候。併し夫婦

は二世と申す事もそふらへば、未來

は必ず夫婦にて候ふ、詞、オ、是やま

あ誠か半七様、こりや、い娘、未來

で夫婦と書いて有るかいや、ア

イ、未來は未來ぢやが、一日なり

と此世で女夫にして遣り度い。

何としてマア此半七は、善右衛門を

殺しましたぞ、どれ、も最少とじ

やどれおれが讀みませう。兎角不孝

の我等に候へども、死後には嘸やお

二人や、宗岸様の御歎き、随分々々

力を付け此身に代りて御孝行に成し

下さるべく候、申し残し度き事ども

は數々候へども、涙に字生も見え難

く、あらあら惜しき筆止申候只々お

通が事のみ頼上候。此上は亡人後（おぼ）

のお念佛、南無阿彌陀佛々々々々々

と、讀も終らず宗岸親子、又臥沈め

ば半兵衛夫婦、お通を中に抱き上げ

初孫の顔が見度いと心に思へど世間

の義理ではまで逢も見もせなんだ、

斯う言ふ事と知つたらば、顔見ぬ内

が増しであつた。愛らし盛りの此お

通、半七と一緒に暮すなら能い樂み

で有らふ物、これ婆見やいの、あれ

何にも知らず手打やあば、ばつかり

オイノ是や孫よ、モウ父も母も無い

程に、此婆と一緒に寝いよ、とはい

ふ物の乳も無く、今から先の寝起に

も、嘸や歎かん親々が、知らずにゐ

るか胸欲者、惨い心いぢらしやと、

言ふ聲洩るゝ三勝が、思はず乳房を

握り締め、詞、乳は爰に有る物を飲ま

して遣りたい、顔見度い乳が張るわ

いのうと身を慄はせ、駈入らんにも

關の戸に空音も成らず羽拔鳥、親は

外面に血の涙、子はやすかたの安か

らぬ、悲しさ迫る内と外、一度にわ

つと湧き出る、涙浪花江、泉川小き

東 西 歌 舞 伎 奮 闘 興 行

十二月一日初日

毎日午後四時開演

第一 栗山大膳 四幕

第二 淨瑠璃曲輪燗 一幕
文樂座太夫特別出演
三味線

第三 人斬り以藏 二場
眞山青果作
田島清彦出

第四 吉例會我對面 一幕

御觀劇料

五等席	五錢
四等席	八錢
三等席	十錢
二等席	一圓
一等席	一圓二十錢
椅子席	三圓
特等席	三圓五十錢

(他に各等入場税一圓)

どうとんぼり
中座

んを汲出す如くなり半七は齒を嚙締
め斯ばかり深き御情、是非もなや勿
體なや、不孝を赦させ給はれと、悔
み歎けば三勝も皆我故の御事と、俱
に詫入る中に半七、詞何時まで泣い
ても返らぬ縁言親父様の御繩目、早
う解くは身の最期、イザ〜急が
ンサアおぢやと立上りしが、今生の別
れにせめてお顔をと差し覗けば三勝
も、お通を一目と、延上り見れども
親子隔ての關何と千萬無量の想ひ、
兩手を合せ伏拜み、合 おさらば 合
〜と云ふ聲も歎きに埋む我家の中
見返り〜死に行く、身のなる果ぞ
哀れなり。半兵衛はつと心付き、詞
此書置の文體では、今宵最期と決め
し半七、宗岸殿も手分して行衛を尋
ねん、サア早ふ〜と身づくろ
ひ、立出んとする所に、思ひ掛なき
表より、詞ヤア〜方々、善右衛門

を殺せし咎人茜屋半七召捕つたりと
呼はつて庄九郎に繩を掛、立出る宮
城十内、詞 半七が殺せし今市の善右
衛門は、國元にて用金を盗みし盜賊
召捕に來りし處、一昨夜半七に殺さ
れし由、則ち善右衛門の同類たる庄
九郎を召捕り、彼が白狀にて半七親
子に科無しと、立寄つて半兵衛が繩
目解けば四人が悦び、夢では無いか
と伏拜み、詞これ〜親父殿、
十内様のお情で半七が命助かるとい
のう、何ぞ命の有る中に、止めて下
され半兵衛殿と、急るを聞いて十内
が詞 何半七は死に出たとや、エ、遅
かりし残念々々、役目なれば心に任
せず、夜明ぬ中に早お行きやれと、
十内が花も實もある櫻井の、掬和ぐ
國の名も、大和五條の茜染今色上し
艶姿其三勝が言の葉を、爰に移して
止めけれ。

新 舊 大 合 同 劇

十二月一日初日

毎日正午二回開演

第一 母 (はゝ) 十一景
鶴見祐輔作
中井泰孝脚色並演出

第二 右 近 櫻 一幕
瀬川春郎作並演出

第三 東海道中膝栗毛 九場
本村錦花作
早瀬豆演出

御 觀 料
一等席 一圓八十錢
二等席 八十錢
一等階 五十錢
椅子席 (他に入場税一圓)

どうとんぼり 角 座



夕ぎり 伊左衛門 曲輪 樟

吉田屋の段

吉田屋の段

夕ぎり

竹本伊達太夫

伊左衛門

竹本伊達太夫

喜左衛門

豊竹和泉太夫

おきさ

豊竹呂太夫

若い者

豊竹千駒太夫

若い者

豊竹竹太夫

鶴澤友衛門造

本曲は近松の「夕霧阿波の鳴渡」の吉田屋の段の改作で、著作年代は明かでないが、安永九年作と推定される。操芝居にかゝつたのは寛政六年五月廿八日道頓堀大西芝居で、此作を元にして豊後節諸流の夕霧物が生れた。物語は新町扇屋の夕ぎり太夫と馴染を重ねて、大盡遊びをしてゐた藤屋伊左衛門は遂に七百貫目の借金を負ひ、勤當となつて今は京大佛馬町に逼塞してゐます。春立つ日の廓の餅つき日、伊左衛門は新町の揚屋吉田喜左衛門の門口に立つたが、尾羽打枯した紙子姿と變つてゐても以前の恩義を思つて、喜左衛門夫婦は座敷へ通して厚く優遇したのであ

るが、子まで成した仲の夕ぎりとは、此頃阿波の平大盡とかに深くなつてゐるとの噂、現に其客の座敷に居たと聞いて、病後の夕ぎり口説して厭味を竝べ、萬歳傾城と罵つて足蹴にし散々に拗ねてゐる折柄母妙順からの使が来て勤當が許され、夕ぎりは身請されて、全てが目出度納まると云ふ筋。

(床本) 吉田屋の段

冬編笠の赤ばりて、紙子の火打膝の皿、笠ふき凌ぐ忍ぶ草、忍ぶとすれど古への、花は嵐の頃に、今日の寒さを食ひしばる、はみ出し鏝も神さびて、鏝つまりし師走の日、胡散らしく吉田屋の、内を覗いて、喜左衛門宿にか、ちよつと逢ひたい、喜左衛門左と、鼻に扇の横柄なる、男共口々に、ヤア何じや、風の神か鳥おどし

ッ

鶴澤清友
鶴澤一郎右衛門

レ
豊澤龍延市
鶴澤綱

人形

藤屋 伊左衛門 吉田 榮 三

吉田屋喜左衛門 桐 竹 門 造

女房 おきさ 吉田 小兵 吉

扇屋 夕ぎり 桐 竹 紋 十 郎

太 鼓 持 吉田 兵 次

か む ろ 桐 竹 門 次

吉田屋 若い者 大 ぜ い

を見るやうなざままで、喜左衛門に逢ひたい。ハハハでも横柄な、オ、さうじや、百貫目も遣ふやうな大盡の云ふやうに、エ、阿呆らしい棒まかされなと云ひければ、ホ、百貫目が夫程に尊いものでもない、喜左衛門といふべき者でいふ程に、さりとては逢はして呉れい。イヤ此奴が、さまざまの事をぬかし居る、夫程に逢ひたくば逢はしてやらう、こんな目に逢はして遣らうと竹箒ふり上ぐる、喜左衛門飛んで出で、ヤレ待て、今日は大事の餅搗き、ひよつと怪我でもあつては悪い、又ねだり者かも知れぬ、そ、うをすなと押しとどめ、喜左衛門に逢ひたいと仰せあるは、何方でござります。何方でござると笠を覗いて、ヤアお前は伊左衛門様、何と喜左、なつかしさに逢ひに來ました。ア、おなつ

かしや、おなつかしや京大佛町に御遁塞と承り、夕霧様より數通の御狀飛脚も二三度奈良大津まで尋ねさせたつた今もお噂、先づお馴染の小座敷で、二年つもるお物語、サア、奥へ奥へと袖引けば、コレ喜左さりとては紙子ざはりが荒い。引けば破れる、掴めば後に師走浪人昔は鎧が迎へに出る、今はやうやう長刀の、草履を脱いで編笠の中の座敷に通りける、お寒からうと喜左衛門、縮緬に紅絹裏の、羽織をふはと打ちかくれば、これはいはれぬ、寒ざらしの伊左衛門少しも苦しからねども、志を着いたすと、戴いて着る有様。喜左衛門つく、見て、さ、浮世じやな、誰れあらう藤屋伊左衛門様に、吉田屋喜左衛門が、着せまする羽織、たとへ蜀江の錦、二重鶴の古錦欄でも、戴いて召しませうか

ホニニ涙がこぼれますと、目をするを見て、コレ喜左、ア、愚痴なぞや、この紙子の仕合せ、さらさら、無念に存ぜぬ。總じて重たい俵物、材木でも、牛馬が背負ふは珍らしからず、犬か猫かが負ふたらば、是はと人が手を拍たう。おのれも恰度その通り、七百貫の借銭負うて、びくともせぬは恐らく藤屋伊左衛門、日本に一人の男、此身が金じゃ、總身が冷えてたまらぬ。ア、いかう冷えるわいの。ヤア總身が金とは忝けない。喜左衛門の餅搗に大きな金がお入りなされた。コレ嬢、まだ蓬萊は飾らねど、まづ正月の心、三方飾つて持つておじゃ。アイと女房が櫻葉に、穂長折敷き椀柑子、蜜柑や何や榎勝栗、是は、お珍らしや伊左衛門様、ようお出でなされました先づ御祝儀のお盃をいたしませう。

イヤコレ内儀、喜左衛門と云ひこなたと云ひ、懇ろに、蓬萊とまで氣が付けども、夕とも霧とも云ひ出さぬほのかに聞けば夕霧は、身が事を氣病みにして、命あやうしと聞いたがきつう重いか、但し又無常の夕霧と聞え失せて了うたか、歎きをかけまいとて云ひ出さぬか誓文で泣くまい語つて聞かしや。泣かぬと云ふ聲も、氣遣ひ涙濁りけるイヤ、是はお道理夕霧様の御氣色も、秋の頃はさんざんで、勤もお引きなされしが、寒に入つてちと御快氣、即ち阿波のお侍様、正月もなさる筈で、今日私が方へおいで成されてでござります。ヤア夫は誠か、眞實かハテ嘘か誠か隣座敷、ちよつと覗いて御覽じませ。伊左衛門はつと急いたる顔色にて、暫し詞も無かりしが、ナウ内儀、天地開き始りてより、誠のあ

る傾城と迦陵頻伽の雄鳥は繪に描いたも見た者がない總嫁の様な傾城めに、モ微塵も心は残らねど、知つての通りあいつが腹から出た俵、しかも男子で明くれば七つ、遣手の玉が才覺で、里に遣つたとやら、定めて遣つたも偽り、捻ぢ殺してかな捨てつらう、阿波の客といふも合點、此前身共と張り合つた阿波の平大盡といふ者、ア、つく、思へば傾城買より紙屑買がましじや、なぜといや、金出して此方へ取る物とては狀文ばかり、七百貫目が紙屑では、富士の山を張抜にせうと儘じや、仕合せの悪い時、何で損をせうも知れぬ無用の涙で紙子の袖を濡らした、繼目の離れぬ其先に、罷り歸らう、ア、申し、夫はあんまり慳貪と申すもの、先づ夕霧様に逢せませう。イヤ、けんどんならば夕霧より、蕎

麥切に致さう、それは餘り御短氣な奥のお客は平様でござりませぬ、平でも坪でも此方仕度はようござると拗ね廻る其内に、奥座敷には手を叩く、禿衆は何處にぞと言つゝ内儀は奥座敷、亭主も何と氣の毒顔、ア、折角御機嫌よかつたに、又例の痛癢か、此の喜左衛門に御めんじなされ何にもいふて下さりませぬ、ちとお氣の靜まるやう、お横にお成りなされませ。アノ大病の其上に、もしもの事があつたならば、ア、儘よ。ドリヤ首尾して參りませうと、枕あてがひ喜左衛門、心残して奥へ行く。過ぎし夜すがの連彈を、思ひ出して伊左衛門、腹立まぎれに調子さへ、あはば何して斯してと胸は二上り三下り、今の憂き身も心から、思ひ廻せば奥の間の歌の唱歌に合の手や、ウタ

M可愛男に逢坂の、關よりつ

らい世のならひ、それよ、あの歌で思ひ出す、去年の月見は奥座敷、底意限なき夜と共に、飲み明したる大騒ぎ、太夫とおれが連彈で、彈いた時の面白さ、彈くその主は變らねど變つたおれが身の上、あいつが心底あの様にあらうとは、思はぬ人に堰とめられて、今は野澤の一とつ水ア、いかさまさうじや、戀も誠も世にある時、人の心は飛鳥川、變るは勤めの習ひじやもの、いつそ逢はずに去んで呉りよ、ア、イヤ〜〜喜左衛門夫婦が志、逢はずに去んでは此胸が、ウタ **M**すまぬ心の中にも暫し、すむはゆかりの月の影、むざんやな夕霧は、流れの昔なつかしく、飛立つ心奥の間の、首尾は朽ちせぬ縁と縁胸と心の相の山、間の襖の工合よく明け暮れ戀しい夫の顔、見るに嬉しく走り寄り、我身を俱に

襦袢に、引きまとひ寄せとんと寝て抱き締め、締め寄せ泣きけるが、申し伊左衛門様、目をさまして下さんせわしや煩うてな、疾うに死る筈なれども、今日まで命ながらへしは、今一度逢はして下さんす、神佛の控へ綱、コレなつかしうは無いかいな顔は見たらは無いかいなと。ゆり起し〜、抱き起せば取つて突退け、ヤコレそこな夕霧のとやら、夕めし殿とやら、節季師走にこなたの様に、暇ではござらぬ、七百貫目の借金負うて、夜晝かせぐ伊左衛門、こんな時寝ねば寝られぬ、邪魔なされな惣嫁どのと、ころりと轉げて空身身に覺えはなけれども、恨みがあらば聞きませう、イヤ〜イヤ〜、寝さしはせぬ〜。コリヤ何とする此體に成つても藤屋伊左衛門、今の様に奥座敷の客に、踏まれたり蹴ら

れたりする傾城に近付きは持たぬ、こゝな萬歳傾城、萬歳ならば春おじや、通りや〜と言ひければ、ム、此夕霧を萬歳とはへ、萬歳傾城の因縁知らずか、知らず言うて聞かさう、侍の足にかけて蹴られるを萬歳傾城といふぞや、まことに目出たうさむらひける。しかも足駄はいて蹴るやら、年立返へる足駄にて、誠に目出たうさむらひける。併し何も身すぎじや、あんなよい衆には蹴られても損はいかぬ。慾も知らねば身が立たぬ、慾若に御萬歳、年立返るあしだにて、誠に目出たうさむらひける町人も蹴る、伊左衛門も蹴る、けるける〜。コレ喜左、餅でも米でも早うやつて、去なしやいのと、譯も涙の捨詞、煙草引きよせ吹く烟管、そらさぬ體にて居たりける、夕霧涙諸共に、恨みられたりかこつのは、

色の習ひといひながら、それは浮氣な水淺黄、はでな浮氣が嬉しうて、人の譏りも世の義理も、白紙に書く文の傳て、返事とる手も心急ぎ、口舌の床のよしあしも、嬉しいにつけ悲しいに、つれて忘れた事はない、夫にお前の悪性を、わしが案じは移り氣な、外にもしやと言がかり、夫が嵩じて内方の、首尾は不首尾と結ぼふれ、勘當の身とならの葉や、この手柏の二人が中、暇乞ひさへ泣くばかり、夫れから絶えておとづれなく、此夕霧をまだ傾城と思ふてか、ほんの女夫じやないかいな。明くれば私も二十二、十五の暮から逢ひかゝり、備けた子さへ早七つ、誠を言はば此頃は、一門中の狀文にも、伊左衛門内よりと書ても人の咎めぬ事私に恨みがあるならば、こなさんも恨みがある。去年の暮から丸一年

會我廼家五郎劇

十一月三十日初日
毎日午後四時半開演

第一神 かくし 二場

第二阿呆陀羅經 一場

第三丘の上 下二場

第四犠牲の舟 一場

第五銀地の末廣 一場

日曜・祭日マチネー正午開演

御觀劇料
櫻 五十錢
菊 八十錢
一 一圓
二 一圓五十錢
三 一圓二十錢
（他二各等入場料一圓）

大阪歌舞伎座

二年越しに音づれなく、それはいく
せの物案じ、夫故に此の病、瘦せ衰
ふたが目に見えぬか、煎薬と煉薬と
針と按摩でやうくと、命繋いでた
まさかに逢うて此方に甘えやうと
思ふところを逃さまな、コリヤむご
らしい何うぞいの、私が心が變つた
ら、踏んではつかり置かんすか、叩
いて腹が癒るかいな、コレ死にかゝ
つて居る夕霧じや、笑ひ顔見せて下
さんせ、エ、エ、エ、心強や、胴
慾な氣強い心とかこち泣き、空に知
られぬ袖の雨、隅なき夜半の月影も
曇るばかりに見えにけり。かゝる所
へ下女はした、遣手禿に女房も、勢
ひかゝつて喜左衛門、申し、伊左
衛門様、く、お前の親御妙順様よ
りお人が参り、御子息様も母屋へ引
取り、あなたも御勸氣救りました。
ほんにそれいな太夫様、お前も身請

の持が明き、大抵嬉しい事ぢやない
オ、く、く、此の喜左衛門が精力で
本腹さして見せませうと、家内が勇
む勢ひにつれて、本腹伊左衛門、喜
びの眉を開らくや扇屋夕霧、名を萬
代の春の花、見る人袖をつらねける

新 興 演 藝 部 歳 末 興 行

十二月一日初日

日本演藝界の王座を目指
す新興演藝部は、スゲイ
メンバーで抱腹絶倒ムチ
ヤクチャに笑はす底抜け
の面白さ、どこまで脱線
するやらこれこそ奇想天
外の爆笑笑殺部隊!!

どうとんぼり

浪花座



はき

もどりかこ いろにあひかた
戻駕色相肩

廓 嘶 の 段

櫻に霞む朱雀野を遙かに見渡した洛陽紫野あたり吾妻の與四郎と浪花の次郎作とが四手駕を下して互にお國自慢から廓話になり駕の客なる禿を呼び出せば、谷の戸開けて鶯のまだ廓馴れぬ風情で禿が駕から現はれ、禿を相手に三人が廓話に華を咲かすといふ廓氣分横溢したものであります。

(床本) **廓 嘶 の 段**

あら玉の年の三年を待ち侘びて待たるゝ顔にまつかほを、合せかゞみのふとんさえ、色でもてるか四ツ手かご、花が人呼ぶうは氣の花が、月に浮かるうは氣な月に、うきにうか

るゝ月花に、與をれ込じゃ、次合點じゃ、かた山じゃ、與合點じゃ、下戸は酒手ではぎの花、次吞込んだ、與様はなる口こちや色上戸、二人もみじも風にやつしごとと拍手取々來りける、與へエン、罷り出でたる者は吾妻の與四郎と申す駕かきにて候、次へエン、罷り出でたる者は浪花の次郎作と申すゑらい駕かきにて候、與アアコレ、なんぼおぬしが浪花と云つても、江戸の様な紫は有るまい、次イヤ何ぼこな様がさういはんしても、江戸に又大阪のやうな揚屋はござんすまい、與ア、仲の町のとうろうが見たいわい、次そんなら住吉、天満、高津の祭りの様な面白い二輪加は有まい、與事も愚や、御殿山、飛鳥山、上野の様な櫻が有か次ヤこいつは一番あやまつた、與へ、ンちつとそふ有まいかハ、何

廓 嘶 の 段

浪花次良作
 禿
 吾妻與四郎

豊竹伊勢太夫
 豊竹竹太夫
 豊竹辰太夫
 豊竹仙糸
 野澤喜代之助
 野澤八造
 鶴澤友太郎
 鶴澤友太郎
 竹澤友十郎
 竹澤園松
 豊澤廣彌
 豊澤仙松

人 形

浪花次良作
 禿
 吾妻與四郎

吉田玉藏
 桐竹紋十郎
 吉田玉幸

の役にも立ぬ事をいかに痴けだわ
い、時に棒組、あの山々の景色を見
やれ、次ドレ〜成程、ア、よい景
色だわい、あれを眺めてさらば一服
二人致さうかい、ふりさけ見れば雪
ならでおのが羽こぼす白鳩や、雲か
煙草の薄煙、輪に成る梅に鶯の、また
さゝ啼搖の摺火打、石よりかたいか
た棒組に、角のとれたる息杖は、五
枚銀杏に三ツ銀杏、よい相肩の戻駕
與何と次郎作おいらがのせて来た振
袖は、何で有ふナ、次あれは鳥原の
傾城、小車太夫の禿さ、與そんなら
爰へ呼出して廓の咄を聞ふぢや有ま
いか、次是はよかるふ、サア〜姉
さん、爰へ出さんせ〜、禿アイ谷
の戸あけて鶯の、まだ、里なれぬ風
情にて、おもはゆげなるその姿、詞
もふし爰は何といふ所でござんすへ
次爰は紫野といふ所さ、禿そんなら

爰は紫野といふ所かへ、與そうだ
〜、時に姉様、何と鳥原の廓の咄
を聞かせる氣はないか、コレそのか
はりおれも又、江戸の吉原の咄を聞
かせる、コレ棒組、おぬしも新町の
咄をする氣はないか、どうだ〜次
そふいへばおれも又、新町で花をや
つた者よ、此駕舁に引かへて、紋日
物日の出立は、腰巻羽織ひとつま
へよしや男の丹前姿りかけ〜寛
濶アち出立、ア、見せたいわい、
與さうで有ふよ、逆もの事に其咄が
聞たいわい、次成程咄して聞そうが
かんじんの羽織がない、禿爰にお大
盡の羽織が有はいな、次ヤコレハ幸
シタガ羽織があつても、大小がない
わい、與ヲットそこらは合點と、息
杖取つて差出せば、次是も新し風俗
と、其儘取つて掴み差、又古に、待
合せ立返りふつてふり出す花吹雪、

傳統の誇り京・中年の行
吉例顔見世興行

當辰

十二日一日初日

毎日ヒルの部午前十時開幕
毎日ヨルの部午後五時開幕

(晝の部) 午前十時開幕

第一 歌舞伎 不破

第二 本朝 烈女鑑

第三 近江源氏先陣館

第四 元祿 忠臣藏

第五 壽會 我對面

(夜の部) 午後五時開幕

第一 妹脊山婦女庭訓

第二 阿波の粉雪

第三 香花戯曲 佐々木高綱

第四 十種の内 俠客御所五郎藏

第五 上の巻 二人猿々
下の巻 三社祭

部一 御観劇料
 五等席 七圓
 四等席 五圓
 三等席 三圓
 二等席 二圓
 一等席 一圓
 他各等入母統一圓
 一階座席は五十錢増し

京都四條 南座

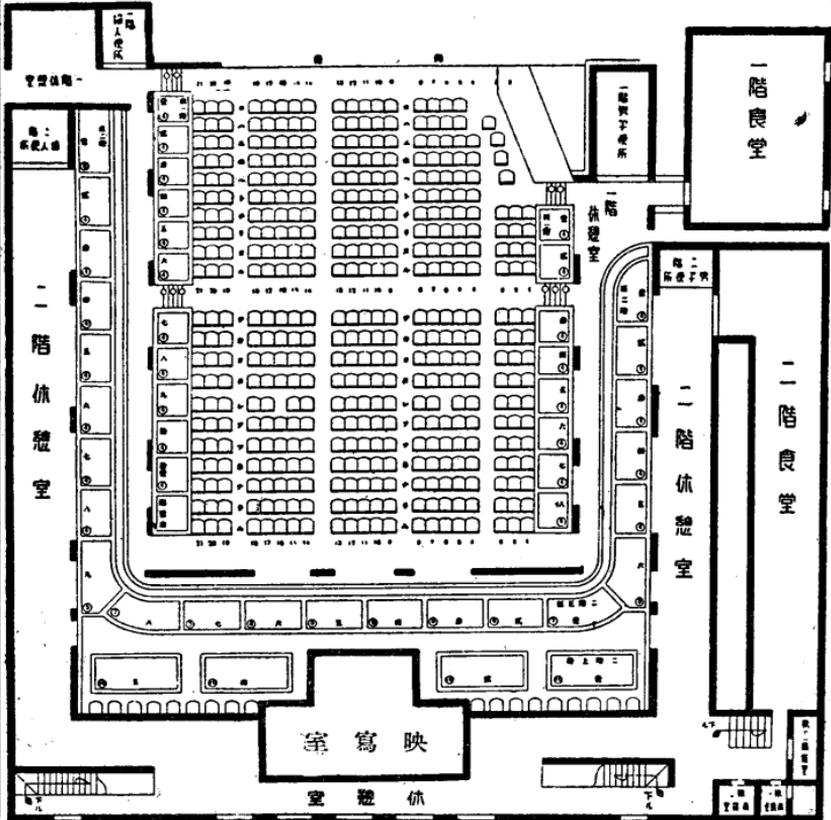
振出す、花の雪よの、こしまき羽
 織くもの帯、上の町ドツコイ、下の
 丁ドツコイ中の、中の丁、さまに
 こがれて柴船の香り床しき一ツまへ
 どつとほめて通した、遠東の男山ヨ
 イコラ、どつこい、ヨイヤナサア、
 〳〵是から江戸の吉原の咄、與
 四郎所望、與先おれがぬれ事と
 いふは、江戸町でなし、二丁目でな
 し、恥しながらへ、小店でしやれて
 アリヤ、〳〵ヨイサ、おと女郎
 衆はなぜにふりやんす、雨か雪か
 とぬれてしつぱり、しめて寝た夜は
 ひげ、〳〵をば引れた、ヤコ
 レひげをば引れた、きつく引れてサ
 ア目がさめた、三五夜なかにまん丸
 顔でナしやれた姿の赤前垂が、ソレ
 〳〵袖を引れた、朝は戀な
 ら枕はしない、まくらはせじとよふ
 言ふた、そりやこそお立じや、小

氣味よい程きふ、引かける扱も身
 につく吸付たばこ名残おしくもせき
 立られて駕をかたげて急ぎけるサア
 〳〵おれが咄は是で仕舞だ、是
 からは姉さんの番、何ぞ面白い咄所
 望だ、そんなら禿も里の咄、
 恥しながら咄ませせふ、花よ、と
 かねやる客は、しんぞふり出す八文
 字、すかん男は皆すかんびん蓼喰ふ
 虫も逢馴染て身に泌み渡る淵瀬川、
 總踊戀はさま、有が中にわけて戀
 路は逢戀待戀忍ぶ戀、我戀は必ず今
 宵も合點か、合點、そなたも合點
 我等も合點あい圖の手くばた吞込ん
 だ、エイ、えいやと手を打、鳴は
 夜明の鐘の音、踊り戯れ諸共に、か
 しこをさして歸りけれ。

籠寅演藝部
 特選まざん大會

神戶松竹劇場 十二月一日より

文樂座御場席案内



御覽席は大部分椅子席になつて居りますからお一人でも御愉快に洋服でもお樂に御見物が出来、またお出入が御自由です。

前賣切符・壹等席のお切符は五日前から發賣致します、また五日以後のお切符も壹等席に限り御豫約申し上げますから上圖の座席表に依つてお早く御望みの御場席をお申し込みになればお心のまゝにお好きな處が御自由にとれます御用命の節お呼出しの電話は南四七壹壹番で御座ります

切符賣場右指定席切符は當日前賣とも正面西側本家入口にて發賣して居ります
二等席・三等席切符は當日正面入口にて發賣致します

觀賞おほえ

昭和十四年十二月 日

假名手本忠臣藏

三勝
半七
艶容女舞衣

夕ぎり
伊左衛門
曲輪
樟

辰鷺色相肩

開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

當文樂座は 既に皆様御承知の通り我大阪に於ける郷土藝術、三位一體の人形淨瑠璃の日本唯一の公演場でもあります。

文樂座人形淨瑠璃は 嘗に大阪の誇りとする舞臺藝術のみならず我日本に於ける古典舞臺藝術の至寶として世界に誇るべきものでもあります。従つて開場毎にこの大使命が全う出来ませうやう、皆様の御期待に反かぬ様、皆様に御満足して頂けるやうと一同不斷の努力を致して居りますが尙御氣付きの點は御客様の御聲として承りたく存じます。

御携帶品は 正面一階に御預り所が御座います。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひ致します。お歸りは混雑致しますから成べく終演一幕前に御受取願ひます。

貴重品は 各自にお持ち下さい。お場席お立ちのときは御携帶願ひます。

お煙草は 一階二階廊下に喫煙台を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。お席では御遠慮下さい。

お食事は 西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室が御座居ます。賣店は 二階東側と一階西側休憩所に御座居ます。

お化粧とお手洗 殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座居ます。

場内にて 寫眞撮影は絶対に断り致します。

御休憩の間は 一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座居ます

お出口は 下足札赤札は正面西本家人口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

案内人は 胸に番號入マークを附けて居りますから御用の節は御申附け下さい、其他一般従業員に不行届の點は御遠慮なく御注意の程お願ひいたします。

出演者 病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから豫め御諒承願ひます。

◇皆様へ御案内◇

當座は此度皆様へのあらゆるサービス機關として案内部を特設いたしました。

人形淨瑠璃についての御質問・各種團體御觀賞會・又は諸種の御會合席上へ出張公演等御相談に應じよろづ、御案内申上げる事に致しました。御一報次第参上、どうぞ御利用下さいませ。

専用電話南⑤三七八八番

松竹株式會社

文樂座

支配人 下村清次郎

昭和十四年十一月卅日印刷
大阪市南區久左衛門町八番地
昭和十四年十二月一日發行 發行所 松竹株式會社大阪支店

大阪市南區久左衛門町八番地
松竹株式會社大阪支店內
編輯兼 鳥江鏡也

大阪市西區土佐堀通一丁目十二
印刷所 永井日英堂印刷所

一部 金二十錢

文樂座南一食堂

御食の事御用は一幕前に御下命賜
はれば至極御便利で御座います

大坂四ツ橋

南温泉料理

御宴會にも
御家族連にも



電話南(75)

一	一	一	七
三	二	二	
二	二	三	〇
四	三	二	一
番	番	番	番